

Mon Nara



Numéro263 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 Juillet 2014

創立20周年記念特別号

◆発刊の趣旨

奈良日仏協会は今年4月に創立20周年を迎え、去る5月11日に記念式典・講演会及び祝賀パーティを開催したところです。関係各位のご参加、御協力に改めて感謝申し上げます。

これら一連の記念事業の締め括りとして、会誌 Mon Nara の「創立20周年記念特別号」を発刊し、式典・講演の記録、会員・元会員からの寄稿文、関連資料などを収録することにしました。本誌が日仏文化交流の一助となると同時に、当協会の継続・発展の一里塚となることを期待します。

◆本誌の構成

記念式典・講演会・祝宴 プログラム	2
会長挨拶「創立20周年にあたって」	3

第1章 記念式典

開会の辞 三野博司	4
祝 辞 奈良県知事、生駒市長	4-5

第2章 記念講演会（講演録）

1. Charles-Henri Brosseau（日本語訳）	6-7
2. 三野博司	8-11
3. Olivier Jamet（フランス語＋日本語訳）	11-15
閉会の辞 坂本成彦	15

第3章 会員寄稿文集「私とフランス」

浅井直子 Comme vous voulez !	16
泉 悦子 本棚の「フランス」	17
工藤順子 母の思い出と共にある私のフランス	18
佐々木幸代 フランス語を始めたきっかけ	18
坂本成彦 忘れ得ぬフランス技術留学	19
Olivier Jamet Pourquoi le Japon ?	20
佐藤美知子 私とフランスの出会い	20
藺田章恵 私のチューター、クローディア	21
谷野知子 フランスと日本の食	22
堤 昇子 私にとって特別な国、フランス	23
村田公子 私とフランス語	23
中浦東洋司 追憶—「フランスの川」紀行	24
中辻純子 シャンソンとフランス語と私	25



式典・講演会会場：奈良女子大学（正面が記念館）

辻内郁子 私とフランス	25
野島正興 彫刻の命令	26
濱 恵介 若き日のフランス留学	27
藤村久美子 私が感じるフランス	28
樋口順一 浦上切支丹流配記念碑について	29
長沼静代 フランスの文化の香り	29
三木康子 音楽留学の思い出	30
南城 守 美術館での至福の一時	30
三澤知香 パリ、ピアノ修行で感じたこと	31
松本サナエ 私とフランス	31
三野博司 ポール・ヴィアラネー先生との出会い	32
森井桂子 フランスの心を読む楽しみ	33
石田充伸 私とフランス語	33

第4章 回顧・資料編

1. 創立の経緯と初期の活動 仲井秀昭	34-35
2. 元会員寄稿文 玉谷直実・川下裕史	36
3. 講師略歴、4. 演奏者・曲目紹介	37-38
5. 歴代幹部役員、6. 運営担当者一覧	39

編集後記 濱 恵介	40
-----------	----

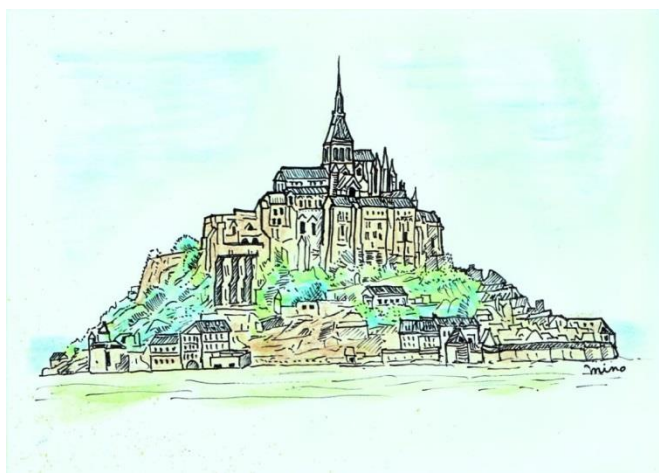


奈良日仏協会 創立 20 周年 記念式典・講演会

「日仏文化交流の未来へ向けて」

2014 年 5 月 11 日 (日)

奈良女子大学記念館



主催：奈良日仏協会

共催：奈良女子大学文学部仏文教室

記念式典・講演会（記念館）

14:00 - 16:30

司会 野島正興（副会長，元NHKアナウンサー）

式典

開会の辞 三野博司（会長，奈良女子大学教授）

来賓祝辞 荒井正吾（奈良県知事）（代読）

山下 真（生駒市長）

講演

・ 90 ans de Diplomatie Culturelle Française au Japon（日本におけるフランス文化外交の 90 年）

シャルランリ・プロソー（在京都フランス総領事）

通訳 菊地歌子（関西大学教授）

・ フランス人作家たちの見た日本と奈良
三野博司（前掲）

・ Echanges Fructueux entre le Japon et la France à l'Époque de Natsume Soseki
（夏目漱石の時代の豊かな日仏交流）

オリヴィエ・ジャメ（副会長，天理大学教授）

通訳 森井桂子（会員，奈良女子大学博士前期課程修了）

質疑応答 通訳 仲井秀昭（理事，関西大学講師）

ピアノ演奏 三木康子（会員，ピアニスト）

武満 徹：雨の樹 素描Ⅱ

三善 晃：アン・ヴェール

ラヴェル：洋上の小舟

ドビュッシー：亜麻色の髪の乙女 沈める寺
花火

閉会の辞 坂本成彦（顧問，前会長，元奈良交通社長）

祝賀パーティ（記念館南隣ラウンジ）

17:00 - 19:00

司会 三木正義（監事，三木ハウスプラン代表）

開会の辞 三野博司（前掲）

シャンソン演奏 梨里香（理事，ヴォーカル）

土井 淳（キーボード）

バラ色の人生 サクランボの実る頃 他

閉会の辞 濱 恵介（事務局長，エコ住宅研究家）

当日配布されたプログラムから転載、挿画：三野博司



創立 20 周年にあたって

会長 三野博司

奈良日仏協会は、このたび創立 20 周年を迎えることができました。1994 年 4 月 23 日の創立式典を伝える『奈良新聞』の記事は、次のように記しています。「フランス語文化圏が保持している現在の実際の姿を、この奈良の地に伝え相互理解の礎にすることを主目的とする奈良日仏協会は本日、奈良市内の菊水楼で発足式典を挙行了。初代会長今西清悟氏、パリ大学名誉教授ルネ・シフェール氏、在大阪ベルギー総領事の P. ネイス氏ほか各界の人士約 130 名が列席した」

私はこの創立式典に立ち会うことができませんでしたが、その直後に入会しました。フランス・アラカルトに講師として招かれたのは、1994 年秋だと記憶しています。同年春フランスでカミュの遺作『最初の人間』が刊行され、夏ごろ『朝日新聞』文化欄にその紹介記事を書きました。それを見た当時の仲井事務局長から、日仏協会で話して欲しいと依頼されました。フランス・アラカルトはこの 5 月に 118 回を迎えました。私がカミュの話をしたのは、発足直後のフランス・アラカルトだったと思います。

それから 2、3 年経って理事就任を依頼されて、理事会に出席するようになりました。当時は高槻に住んでいたせいもあり、奈良日仏協会の催しに常時参加するという状態ではありませんでした。それでも、フランス大使を招いての春日大社での昼食会、シャンパーニュからやって来た親日団体との交流会、ブルターニュからやってきた劇団の上演など、さまざまな活動があったことを記憶しています。

2001 年西大寺に転居して以降は、奈良女子大学で、フランスからやってきた作家、学者、映画監督などの講演会を 10 回以上行いました。フランス人演出家や音楽家を秋篠音楽堂に迎えての音楽劇上演もありました。

2007 年 4 月から 2013 年 3 月まで、勤務校のほうで評議員を 3 年、文学部長を 3 年務めて、学内業務に多忙をきわめ、日仏協会の活動からは遠ざかるようになりました。この間、2007 年には、創立以来 13 年にわたって活動の推進役であった仲井事務局長の退任という「事件」がありました。詳細については差し控えますが、ひとつの転換点であったことは確かです。第 4 代坂本会長からの要請で、私が副会長に就任したのは 2009 年です。ただ、「Mon Nara」に連載を書く以外は、あまり貢献できなかったのが残念です。2013 年 4 月からよ

うやく時間の余裕ができて、奈良女子大学記念館において Fête de la Musique のコンサートを実施しました。

20 年のあいだには、他にもさまざまな活動がありました。フランス総領事が新しく赴任されるたびに奈良にお迎えし、アルザス地方の親日団体との交流を進め、リヨンから来た少年合唱団の公演を主催するなどの活動がありました。この間開催したフランス音楽やシャンソンのコンサートは数知れません。他にも美術鑑賞会、教養講座、フランス映画のシネクラブ例会などを開催して、文化・芸術分野での積極的な活動を続けてきました。さらに新年会、お花見会、ワイン・パーティを通じて、会員相互の親睦・交流を深め、会員主催によるフランス語講座や文化講座の支援を積極的に行ってまいりました。

なかでも、途中何度か中断しながらも装いを新たにして連綿と続いてきたフランス・アラカルト、そして 2014 年 6 月で 262 号*を数えるに至った誇るべき会誌「Mon Nara」の発行、この二つが活動の基盤であったと思います。

私自身はこれらの活動の一部に関わっただけですが、すべては、その都度の役員・会員の熱意によって支えられてきたものです。創立以来の会員の方もあれば、去って行かれた方、あるいは新たに参加された方、また惜しくも物故された方もあります。それらの方々のフランスに対する熱い思いが 20 年の歴史となっています。

この 20 年のあいだに日本とフランスを取り巻く状況は大きく変化しました。新聞やテレビでフランスのことが話題になる機会が激減しました。良いニュースであれ、悪いニュースであれ（こちらのほうが圧倒的に多いですが）、話題になるのは近隣のアジアの国々です。ヨーロッパはむしろ遠くなくなってしまった感があります。

しかし、状況がどのように変化しようとも、私たち一人ひとりのフランスとの関わりこそが大事です。そして、政治や経済のありように左右されず、互いの文化を尊重し、慈しみ、交流して、それぞれが豊かになること、これこそが協会の目的です。

20 年の歴史を築き上げてきたこれまでのすべての役員・会員の志を受け継いで、今後とも着実な活動を行って行くことを目指したいと思います。



*当協会設立の母体、奈良フランス語クラブ会報からの通算

第1章 記念式典

(開会：14:00)

■開会の辞

奈良日仏協会会長 三野博司

皆さん、こんにちは。本日は、こんなにも大勢の方に、私どもの奈良日仏協会創立20周年記念式典にお出でいただき、誠にありがとうございます。また、本日も講演いただきます在京都フランス総領事シャルラン・ブロッソー様、そしてご祝辞を頂戴いたします奈良県知事荒井正吾様、生駒市長山下真様、並びに御来賓の皆様のご列席にあつく御礼申し上げます。

奈良日仏協会は、1994年4月に創立しまして今年で丁度20年となります。私、この2月に就任したばかりの5代目会長ですが、これまでの会長は、奈良の一流企業の社長経験のある方ばかりで、初めての大学人の会長となります。私の職場であります奈良女子大学において、さらには国の重要文化財でもありますこの記念館で式典を執り行うことができ、大変嬉しく思っております。

20周年ということですが、20というのは、フランスでは格別の数字であります。皆さんご承知の通り、80はキャトルヴァン(4×20)と申します。これはケルト文化の20進法の名残であると言われています。20進法は他の分野でも見られまして、学校の試験で答案が返ってくると、例えば14点。恐ろしく低い評価のように見えますが、実は20分の14なので70点、そう悪くない訳です。ミシュランのレストランガイドでは三つ星が最高点ですが、ゴー・ミヨのほうは20点満点です。このようにフランスでは20進法が残っております。そこでは20を区切りに位が一つ上がります。ということで、私どもの協会も明日から位を一つ上げてみよう、意気込んでおります。

本日は記念式典、講演会、ピアノ演奏、夕刻から祝賀パーティと予定しておりますが、すべて奈良日仏協会の主催、奈良女子大学仏文教室の共催の形で、執り行います。とりわけ奈良日仏協会としては、総力をあげて準備に取り組んでまいりました。しかし何分不慣れなことでもあり、不備な点、至らぬ点があるかと思ひます。そこは20という有難い数字に免じて、ご容赦くださるようお願いいたします。

最後にもう一度、本日は本当にたくさんお越しいただき有難うございます。

■来賓祝辞

奈良県知事 荒井正吾 様

本日、奈良日仏協会創立20周年記念式典が盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

貴協会は、1994年に創立されて以来、様々な文化・芸術活動や幅広い交流活動を通して、日仏間の文化交流の発展に寄与されるとともに、奈良の魅力を多くのフランスの方々に伝えてこられました。歴史ある奈良の地において文化大国フランスとの人的、文化的交流が図れることは非常に意義深いことであります。改めまして、歴代会長を中心とする皆様方の熱意と日頃からのご尽力に深く敬意を表します。

自身の経歴を申し上げますと、OECD 日本政府代表部参事官として3年間パリに在住したことがあり、フランスはとても親しみのある国でございます。本県におきましても、奈良市とベルサイユ市が1986年に、桜井市とシャルトル市が1989年に姉妹都市提携を結んでおり、このように、地方自治体間での交流が着実に進められていることを大変嬉しく思います。

貴協会が創立20周年を迎えられる本年は、日仏文化交流90周年という記念すべき年でもあります。この節目の年に、両国間の人の往来がますます活発になるとともに、長年に亘る交流により培われた日仏間の相互理解、相互信頼、がさらに発展することを心から期待する次第です。本県といたしましては、今後も貴協会と手を携えて、日仏友好関係の発展に貢献してまいります。



いと考えておりますので、引き続きご協力を賜れば幸甚に存じます。

最後になりましたが、三野博司会長、シャルランリ・ブローソー在京都フランス総領事をはじめ、ご臨席の皆様方のご健勝、奈良日仏協会のますますのご発展を祈念してお祝いの言葉といたします。

平成 26 年（2014 年）5 月 11 日

奈良県知事 荒井正吾

（奈良県知事公室国際課長 及川あずさ様、代読）

生駒市長 山下 真 様

皆様こんにちは。本日は奈良日仏協会の創立 20 周年記念式典の盛会、誠にありがとうございます。なぜ生駒市長がここにいるのか、皆さん訝しく思っておられるのではないのでしょうか。前会長の坂本さん、副会長の野島さん、事務局長の濱さん、もちろん会長の三野先生とも以前から面識があります。これに加えて私は大学に二回行っておりまして、一回目にフランス文学を専攻した関係で、呼びいただいたのかな、と思っております。

卒業に当たってはアルベール・カミュの *La Peste*（ペスト）という作品について論じたのですが、当時は不勉強な学生で、フランス文学ではとても飯は食えないだろう、と思いました。学生時代に約 1 年間休学して、フランスの南東部のグルノーブルへ語学留学をして以来、フランスには大変親しみを感じています。勿論、フランス料理やワインは大好きですし、今日演奏されるドビュッシーやラヴェルなどフランス音楽も大好きです。本日の講演テーマは興味深く、またピアノ演奏も大変楽しみに、ここに来させていただきました。

地方自治体の首長として、フランスと関わることはあまりないのですが、最近のフランスについて注目しているのはパクス（PACS）という制度です。これにはフランスでは大多数がカトリックであることから離婚が難しいという背景があります。PACS という制度は、恋人カップルに婚姻関係に近い法的保護を与えるものです。これが功を奏したのか、先進国の中で合計特殊出生率（女性が生涯に産む子供の数）が 2 を超えているのは、ほとんどフランスだけという状況です。この制度でびっくりするのは、カップルのどちらか一方が通告するだけで共同生活を解消できることで、制度として本当に良いのか、日本で定着するのかどうか分かりませんが、フランスはこの少子化時代に人口を維持している、という点に注目しているところではあります。

余談になりましたが、本日は最後のパーティまで出席させていただくつもりで、来ております。フランス好きの皆さんと色々お話しをし、交流させていただくことを楽しみにしておりますので、どうぞ気軽にお声かけてくだされば、と思います。本日は、大変おめでとうございます。

（注：PACS Pacte Civil de Solidarité）

来賓紹介：

大手前大学学長、日本フランス語フランス文学会会長 柏木 隆雄 様

元 アリانس・フランセーズ大阪館長、元 奈良日仏協会顧問 フレデリック・ダール 様

大阪日仏協会事務局長（会長代理）舟木 正巳 様

三重日仏協会理事（会長代理）矢野 隆嗣 様

奈良日独協会理事（会長代理）林 保之 様

（特別列席）

奈良女子大学 学長 今岡 春樹 様



第2章 記念講演会

1. シャルランリ・ブロッソー様（在京都フランス総領事）

Monsieur Charles-Henri Brosseau

日本におけるフランス文化外交の 90 年

90 ans de la Diplomatie Culturelle Française au Japon

（通訳：菊地歌子様、関西大学教授）



皆さんこんにちは。日本におけるフランス文化外交の 90 年という題で 30 分ほどお話をさせていただきますが、その前にお礼を申し上げたいと思います。

まず、奈良日仏協会の皆様、会長の三野様にお招きいただいたことにお礼申し上げます。この素晴らしい会場を提供された奈良女子大学の皆様、そして、奈良県知事のご祝辞に感謝いたします。

誕生から 20 年というのは成人になることを意味します。奈良日仏協会が成人を迎えたことにお祝いを申し上げます。二十歳（はたち）というのは若さの象徴でもあります。若さと活力に満ちこれからますます花開くことと確信いたします。

我々にとっても、今年は日本におけるフランス文化外交 90 周年という記念すべき年であります。その端緒は 1924 年に遡ります。そこで今日は、奈良日仏協会の創立 20 周年に際し、日仏文化協力 90 周年についてお話ししたいと思います。

1924 年の話を始める前に、フランスの外交に関する基本的な考え方からお話を始めます。そこには三つの特徴的な事柄があります。それは、1) 伝統の古さ、2) 国の役割、そして 3) フランス語の重要性、ということです。古い伝統を持つフランス外交においては、文化が常に中心的な地位を占めてまいりました。フランス近代外交の始まりは、ルネッサンス期に遡ります。フランソワ一世は文芸を擁護し文化を外交に利用しようとしていました。例えば、詩人のデュ・ベレーをローマに派遣し、当時イタリアで華開いていた文化を学ばせフランスの文化・芸術の発展に役立てようとしていました。その当時すでに、文化とフランス語は切り離せないものになっていました。

ここは奈良ですので、その姉妹都市ベルサイユとルイ 14 世についてお話しをしなければなりません。

まず、文化に関する外交には、ルイ 14 世の逸話を取り上げたいと思います。ルイ 14 世は非常に若くして国王になりましたが、まだ年若い王が権力の座について最初にしたことは、アカデミー・フランセーズへの一つの質問でした。それは「偉大な国王になるには何をすればよいのか」という簡潔なものでした。アカデミー・フランセーズは慎重に審議し、次のような結論を国王に伝えました。1) 過去を振り返り学ぶこと、2) 戦いに勝って国土を拡大すること、3) 長く残るモニュメントを建設すること、そして 4) 文化、芸術、文学を擁護すること。

文化が政治・外交において重要な位置を占めることは、フランス革命後ナポレオンの時代にも引き継がれ、民法（ナポレオン法典）の制定につながります。法典を整備するということは、社会の中心に法律と文化を据えるという考え方の表れです。

二番目のフランス外交の特徴は国家の役割です。このような歴史から文化外交は、文化省ではなく外務省が管轄しています。文化省は近年に創設された組織で、フランス文化を世界に広める責任は、歴史的に外務省が担ってきました。近年は文化の受容の問題が重要性を増しています。自由市場の中で貿易が盛んになっていますが、文化の交流は物の流通とは全く違うもの、と考えます。国には自国の文化を守る役割があり、文化は自由市場に任せるものではありません。映画を例に取ってみましょう。今日、アメリカの映画が世界を支配する状態ですが、フランスにとっても映画は非常に重要な産業で、文化として守らなければなりません。

三番目の言語、フランス語の役割についてお話しします。歴史的に見てフランス語がヨーロッパ全域に広まったのは、17 世紀、啓蒙の時代です。この現象は軍事的、経済的な征服ではなく、精神的ないし個人的な意味での征服と言えます。スペイン語や英語が他の理由で世界的に普及したのに対し、フランス語は啓蒙運動によって世界に広がった、という違いがあります。そして、フランス革命の後に、フランス語は自由・平等・博愛などの思想と共に普及し、精神的な側面が重視されたと言えます。勿論、フランスによ

る植民地化の時代もありました。現在世界の色々な地域でフランス語が使われているのは、その結果です。フランスの文化外交で特筆すべきことは、フランス語が思想・価値観と深く結びついていることです。つまりフランス語が広まることは、価値観を共有することにつながります。

以上、フランスの文化外交全体に関する特徴をお話ししました。ここからは、日本とフランスの文化交流 90 周年に話題を戻したいと思います。

90 年と言うのは、実際の日仏の関係から見れば、短い期間です。両国の関係はもっと古く 1858 年に遡ります。時代が明治になって、日本政府に招聘されたフランス人達は、国の開発や整備に携わりました。先ほど民法の話が出ましたが、日本政府はボアソナードに日本の法整備を託しました。彼らは当時のフランス最高の技術や制度を日本に紹介したのです。ここで興味深いのは、フランス政府がボアソナードを派遣したのではなく、日本政府が彼を招いたことです。

この時期にフランスでは、日本文化に対する関心が非常に高まり「ジャポニスム」と呼ばれ人気が出ました。この時期にはまだ「文化外交」と言うべきものはなく、ただ日仏はお互いの文化に魅せられ興味を持ち合っていた、という段階でした。

そして 90 年前、1924 年に駐日フランス大使ポール・クロードルが日仏会館を創設しました。これが日仏文化交流拠点のモデルになり、3 年後の 1927 年には京都に日仏学館が創設されます。東京・京都の施設は、日仏文化交流の象徴となり、フランス語とフランス文化の紹介に貢献するだけでなく、日本の資金援助が運営に貢献していることが特徴でした。関西日仏学館の実現には、関西の財界である稲畑産業の資金提供があり、そのお陰でこの施設は今日も存続しているのです。

この時期の次には、第二次世界大戦があり、戦後はアメリカによる占領期を経て、1960、70 年代には日仏協力関係の黄金期を迎えます。その後、日仏関係は調整期に入ります。何故「調整の時代」か、と言いますと、日本は経済的に大きく発展し「文化メセナ」が重要な位置を占めるようになります。一方、フランスは経済危機にみまわれ、国からの資金が徐々に削減されました。

このような複雑な時代にあって、どのようにフランス文化を普及・拡大させるための新たなヴィジョンを持ち日本との協力関係を築き発展させるのか、という挑戦があります。これには三つの軸が考えられます。第一はどのようにして日本の文化外交と協働できるか、第二は実際どのようにフランス文化のヴィジョン及び日本の文化関係組織とのパートナーシップのヴィジョンを伝えるか、そして第三はここ日本でどのようにフランス文化の組織的なネットワークを見出せるか、です。

第一の軸としては、1924 年に日仏会館ができ、日本におけるフランス文化紹介の拠点ができました。そして 1997 年には、パリに日本文化会館が開設されました。この Maison de la Culture du Japon は、日本における日仏会館と同等の組織です。

フランスの文化外交がユネスコに対して「文化の多様性」の重要性を訴えているのに対し、日本の文化外交は、そうではないようです。貿易の分野でも文化、特に映画は重要だと考えます。

二番目の点について。以前からフランスの文化外交は *rayonnement* (威光) という言葉に象徴され、これは太陽の光が地を照らすように、フランス文化は太陽のように世界を光で照らす、という考えが基本にありました。現在はもう少し謙虚にまたは現実的になって、他の文化との対話によってフランス文化が深まる、という考えになっています。

三番目、ネットワークとしては、最近、日仏学院や日仏学館がアンスティチュ・フランセに組織替えされました。これは東京、京都、横浜、福岡にあります。以前の外務省に代わって、今は在日フランス大使館文化部の管轄になっています。

アンスティチュ・フランセは孤立した組織ではなく、昔からあるアリアンス・フランセーズと協力関係にあり、それぞれの地域で活動を展開しています。伝統的な威光の影響力を重視しますが、同時に対話、とりわけ日本各地にある日仏協会との対話が非常に大切だと思います。本日のような講演会、コンサートなどの催しは、日仏文化交流において奈良日仏協会の役割がいかに重要であるかを示すものでもあります。 ご清聴ありがとうございました。



注：この講演録は、ブローネ総領事のフランス語による講演と菊地教授による日本語通訳の録音をもとに、菊地様の助言を得て、当協会の責任で取りまとめたものです。

2. 三野博司（奈良日仏協会会長、奈良女子大学教授）

フランス人作家たちの見た奈良

私は、10年以上前から「フランスから見た日本」の主題のもとに、実際の来日体験に基づきそれぞれ個人的なテキストを書き残したフランス人作家たちを論じてきました。本日は彼らが見た「奈良」の姿を、かんたんに紹介したいと思います。

（1）ポール・クロードル

1921年11月、クロードルは駐日大使として東京に赴任します。以後、1925年の一時帰国をはさんで、27年2月の離日にいたるまで、彼は大使としての本務のかたわら、日本各地を訪れ、日本文化の探求を精力的に継続することになります。この間、彼の『日記』によれば、奈良を訪れたのは3度です。

まず赴任の翌春、1922年5月21日、クロードルは京都を訪れたあと、その翌日奈良へと向かいます。詳細は省略しますが、『日記』には、鹿、五重塔、大仏、博物館、古刹法隆寺、などの文字が見えます。ここには、詩人のまなざしがとらえた奈良の印象が簡潔かつあざやかに描写されています。

この最初の奈良訪問のあと、同年8月にクロードルは日光で「日本の伝統とフランスの伝統」と題した講演を行います。そこでは「私の心を打ったことのひとつは、日本の古代期の仏教に関して、例えば奈良やその近隣の寺院で数多くの、それもきわめて美しい仏像が見られることです」と述べて、こうした美点が平安朝以降には失われてしまうと嘆くのです。

クロードル2度目の奈良訪問は、翌1923年4月中旬でした。彼は県庁職員と一緒に吉野へ向かいます。「満員電車。小さな車で3か所訪問。吉野は山の中、特別な花が引き寄せる蜜蜂の大群にも似た大勢の人の群れ」と、『日記』には記されています。

1925年1月23日、クロードルは休暇のため一時的に離日しますが、その直前の懇親会において、日本で特に強い印象を受けたものとして、「富士山、日光、京都、奈良」のすばらしい光景をあげていることを指摘しておきましょう。

ほぼ1年をフランスで過ごした後、再来日したクロードルは、1926年5月5日、3度目の、そして最後の奈良訪問を行います。「深夜、奈良。桜の森。午後、長谷寺、牡丹。翌日は大雨、薬師寺、日本最古の黒い青銅の三仏が光を放つ」と、簡潔に『日記』に記しています。長谷寺では時あたかも牡丹満開の季節であり、ことのほか強い印象を受けたクロードルは、1926年の『百扇帖』に収められた短詩でそれを詠うことになります。

この短詩集は実際には100篇ではなく、172篇の詩が収載されていますが、そのうちの5篇において、牡丹があらわれます。それらを訳しておきましょう。

「白牡丹の芯にあるもの／それは色ではなく／色の思い出／それは匂ではなく／匂の思い出」

「牡丹花／わたしたちの心のうちで／思考に先だつ／真紅のいろ」

「わたしは世界の涯から来た／長谷寺の白牡丹の奥底に隠れている／淡紅のなにかを見るために」

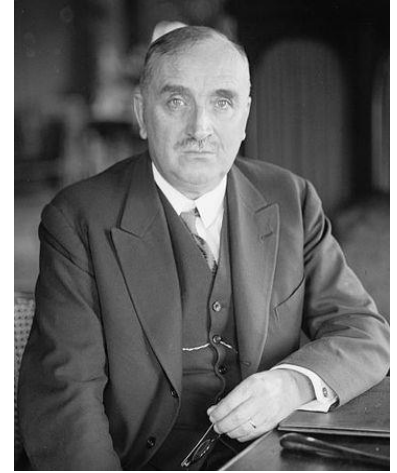
「血は赤く、それに劣らず／牡丹は白い」

「牡丹の芯／黒い蜂は陶然として／コルセットから／至高の毒針を／出し入れする」

さらに、もう一篇、『百扇帖』には、楠の巨木からつくられた十一面観音像を詠った短詩も収められています。「暗い葉叢をすみやかに逃れた／美しく巨大な柱身／黄金の足だけをみせる／長谷寺の観音」

（2）アンドレ・マルロー マルローは4度来日し、そして京都と同時にかならず奈良を訪問しました。最初の来日は1931年、彼はまだ日本では無名の作家でした。第二次大戦後、マルローは小説よりはむしろ美術批評の仕事を精力的に行いますが、奈良との関連では『芸術心理学』三部作（1949年）をあげる必要があるでしょう。その第1巻『空想美術館』第5章では、消失した法隆寺の壁画について触れています。

「ジャポニスムも、例えば浮世絵や漆器類の装飾美術は、時代的にはごく短い間しか影響を与えなかった。それゆえに、古代日本の芸術が知られるようになると、いわゆる洗練された日本芸術などはたちまち





影がうすくなってしまった。今日どんな芸術家が、北斎を、いや雪村作品でさえも、奈良の〔法隆寺の〕壁画にあえて比較しようとする者があるだろうか」

日本美術に対するマルローの態度は、初めから一貫しています。彼は浮世絵に代表されるようなジャポニズムではなく、むしろ大陸からの影響を留めている奈良の仏教美術をこそ高く評価するのです。

その後、マルローは絵画から彫刻へと対象を広げて、1954年に『世界彫刻の空想美術館』を刊行します。日本部門では、16作品が選ばれてその写真が掲げられており、そのうち9作品が奈良のものです。しかし、この時点において、マルローの来日体験は1931年のただ1度だけであり、これらすべての仏像を彼が実際に目にしたわけではないでしょう。中宮寺と法隆寺の仏像を除けば、多くは写真複製によって知ったものと思われます。

1974年5月、マルローは4度目にして、最後の来日を果たしますが、その直前の3月22日、竹本忠雄とのインタビューにおいて、こう述べています。

「それというのも、私が愛する日本とは、奈良の日本なのだから。この奈良の日本というのが西欧ではまったく知られていないんでね。なにしろ、西欧の日本とは、依然として18世紀の日本なんだから」

そして、1974年5月13日～6月1日、国際交流基金と朝日新聞の招聘により来日した彼は、24日に奈良に入り、これまでとほぼ同じ行程で、東大寺、春日大社、唐招提寺、法隆寺を訪れます。高階秀爾のインタビューでは、彼はことのほか鍾愛する百済観音について語っています。

「私は日本にきて、非常に多くの彫像、彫刻作品を見ましたが、そのいずれも百済観音と並べてみると、まるで力が違うように思われる。百済観音が持っている力強さは、まさにそこに見られるいわば野蛮な魔術的なものが、いまなおわれわれに語りかけてくるからだといえます」

最後に、ミシェル・テマンのことは引いておきましょう。彼はその著『アンドレ・マルローの日本』において、特に一節を割いて、マルローと奈良について論じています。

「マルローは〈大日本〉について繰り返し語っている。帝国主義や戦争に陥った日本ではなく、江戸時代や明治時代の日本でもなく、日本文明の揺籃期の奈良時代に燦然と輝いた日本のことだ。マルローはこの古い都の芸術と、類いまれなまでの精巧さをもったそのフォルム、寺社、彫刻に魅せられた。彼によれば、奈良の彫刻は今でも、魂を失っていない。奈良時代は日本文明創設の動きのなかで特異な存在であるとも言う」

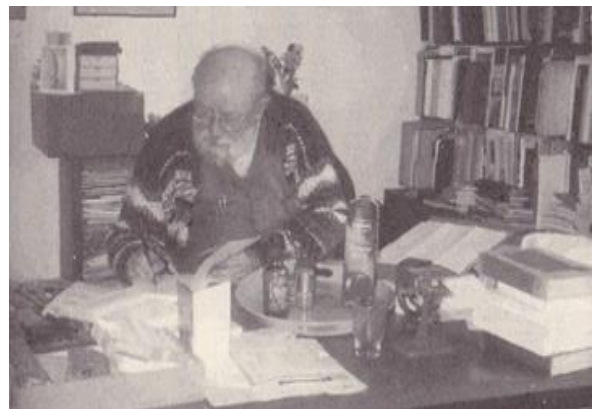
クローデルとマルローをまとめてみましょう。クローデルは6年にわたる在日のあいだ、3度奈良を訪れ、寺院や仏像、そして桜や牡丹の花を愛でました。他方で、マルローは4度来日し、その期間は1週間から3週間と短いものでしたが、必ず奈良を訪れました。彼の関心は仏教美術にあり、これこそジャポニズム以上に評価されるべきものだと言ったのです。

(3) ミシェル・ビュトール

ビュトールは何度か来日していますが、2002年には、奈良日仏協会と奈良女子大学文学部仏文教室の主催により、奈良女子大学において講演会が開催されました。これを縁として、翌2003年、渡仏した私はビュトールの自宅を訪れてインタビューを行い、これは岩波書店から刊行されている『文学』に「ビュトール会見記—マルロー、バルト、日本」として掲載されました。

ビュトールは、長いあいだ日本について一冊の本を書こうと夢見ていましたが、ついに果たせず、その代わりに、それまでに書いた日本に関する短い文章を集めて、1994年『フランスから見た日本』としてまとめました。

この本のなかでは、彼は法隆寺について語っています。止利仏師の作になる釈迦三尊像について詳細に論じたあと、東方を治める薬師如来に言及し、最後は夢殿のなかにある救世観音によって結んでいます。



「聖徳太子がみずから建立した寺院の東の端、現在もその姿をとどめている八角形の建物のなかで眠っていたとき、彼は薬師如来の不安な夢のただなかで、観音と同様に列島に住むすべての人々を西方へと運んでいくことを夢見ていたに違いない。そして人々にあがめられるこの力強い仏像は、何世紀ものあいだ絹の衣に包まれていたが、1884年にはじめてエルネスト・フェノロサによって解きほだかれた。日本はそのとき東方からやってきた西洋人によってみずからを開いたのだが、その仏像は伝えられてきた言葉のとおり、太子の姿をとどめていたのである」

マルローが美術作品としての百済観音像を高く評価したのに対して、ビュトールはむしろ救世観音像を通して、審美的観点からというよりは、この像制作に込められた人々の信仰へと関心を向けて、聖徳太子の人物像に思いを馳せるのです。

(4) ジャン＝フィリップ・トゥーサン

トゥーサンもまた、何度も日本に来ている作家です。2003年には、奈良日仏協会が招いて、奈良女子大学で講演会を開催しました。

2000年、彼は紀行エッセイである『セルフポートレート、異国にて』を刊行します。目次には東京、香港、ベルリン、プラハ、京都、コルシカ、ヴェトナム、チュニジアの都市名や国名が並んでいて、そのなかに「奈良、日本の古都」との章題も見えます。

「奈良駅中央口に面したカフェの、屋根つきテラスの片隅にH教授と一緒に腰を下ろして、約束した三人がやって来るのを待っていた」とはじまりますが、このあと話は意外な展開を見せることになるのです。H教授は、「午後は日本の伝統芸能鑑賞や新薬師寺、春日大社訪問に費やすよりも（午前中すでに東大寺を訪ねていた）、もっと大衆的で、しかも教授によれば同じように有益なスペクタクルであるストリップを見物に行きませんか」と提案するのです。そこで、彼ら一行は、当時まだ奈良で上演を行っていたストリップ劇場へ行くことになり、踊り子のわいせつな演技がこと細かに描写されて、彼女の使い古しのちり紙のおぞましさが語られたあと、このエッセイは「とにかく、メリー・クリスマス」と終わります。

これは1996年12月、おん祭りの時期に奈良を訪れたトゥーサンの体験に基づいています。H教授は、当時奈良日仏協会事務局長（現理事）の仲井さんをモデルにしています。軽妙なユーモアをたたえたその語りは、彼の小説の作風にも通じるものですが、それにしても、クローデルやマルローからずいぶんと遠いところに来てしまったと思わずにはいられません。トゥーサンにとって、もはや奈良とは大仏でも法隆寺でもないのです。自宅に居ながらにして世界中の歴史建造物や名所旧跡のみならず秘境の絶景にいたるまで、手軽に鮮明な映像で見ることのできる時代に生きている作家にとって、異世界体験の表出はこれまでとは違ったものにならざるをえません。そこには絵葉書的な紋切り型を避けようとする彼の戦略が感じられます。

(5) エリック・ファーク

2012年8月末から12月末まで、エリック・ファークは京都のヴィラ九条山に滞在し、日本各地を精力的に旅行しました。その間、11月には、当時まだ翻訳の出ていなかった小説『長崎』をめぐる奈良女子



大学で講演を行い、さらに12月には、奈良ドットFMに出演して語りました。この4か月の滞日体験に基づいて、ファークは、2014年2月に『フクシマを超えてー日本滞日記』を刊行しましたが、そのなかから奈良訪問に関する記述を訳出してみましょう。

「2012年11月11日（日） 奈良女子大学と奈良日仏協会に招かれて、聴衆の前で話すために奈良を訪れた。講演会に先立って、出迎えてくれた二人の教授と昼食をともにした。奈良女子大学文学部長であり、アルベール・カミュの専門家である三野博司と、大阪の大学で教鞭をとっている仲井秀昭だ。数年前には、彼らの協会はミシェル・ビュトール、そしてまたジャン＝フィリップ・トゥーサンを招いて講演会を行った（トゥーサンは仲井教授をHのイニシャルのもとで、自分のエッセイの登場人物として描いた）」



このあと、ファーフは自分が高く評価する河瀬直美映画や、宇多茂樹さんが経営するカフェについて語り、さらにこう続けています。

「三野博司との会話は、カミュをめぐってなされた。彼が先月旅した作家の生地であるアルジェリア、彼がパリに滞在するたびにガリマール社の事務室へ会いに行くロジェ・グルニエ、彼がクレルモン＝フェラン大学に提出した博士論文を 1987 年に出版したジョゼ・コルチ書店、さらにはカミュの生誕 100 年である 2013 年の行事について」

そして、12 月 20 日（木）、離日の 3 日前、ファーフはふたたび奈良にやって来て、仲井さん主宰するローカル・ラジオ番組に出演します。

「夕刻、奈良の旧市街にある民家で、ラジオ番組に出席する。すでに 11 月に出会った仲井秀昭と三野博司が同席。木造の家なので肌をさすような寒さだ。アルベール・カミュについての著作のある三野博司が、このローカル・ラジオのマイクに向かって、危機の時代においてカミュを読むことの意義を語る」

最後に、この書物執筆中に、ファーフ氏から私宛に送られてきた 2013 年 9 月 16 日付けのメールを引用して、終えることにしましょう。

「私の本のタイトルは『フクシマを超えてー日本滞在日記』となるでしょう。この表題を選んだのはフランスの読者にこう言いたいからです。あれほどの大惨事にもかかわらず、この国はその文化的で人間的な豊饒さのなかで生き続けている、この国は歩みを止めることはなかった、地震や津波や放射能にもかかわらずこの国が何を実行しているのかを見たまえ…。これは少しカミュ的と言ってはいいのではありませんか、人生は不条理だ、しかしそれにもかかわらず私たちは最善を尽くして生きよう…」

* * * * *

3. オリヴィエ・ジャメ（奈良日仏協会副会長、天理大学教授）Olivier Jamet

夏目漱石の時代の豊かな日仏交流

Echanges Fructueux entre le Japon et la France à l'Époque de Natsume Sôseki

Natsume Sôseki a vécu et créa son oeuvre entre 1867 et 1916. Cette période historique fut cruciale, aussi bien pour le Japon que pour la France, puisque ce fut l'époque où nos deux pays connurent une véritable métamorphose et aussi de très graves soubresauts.

En ce qui concerne les échanges qui eurent lieu du Japon en direction de la France, ils concernèrent principalement les arts, arts plastiques et art des jardins. Pour illustrer cette tendance, nous présenterons ce qu'on a appelé le japonisme et les jardins japonais.

Par contre, en ce qui concerne les échanges qui eurent lieu de la France en direction du Japon, l'apport et la pénétration s'opéreront principalement dans le domaine des sciences, des techniques de l'ingénieur, du droit ou de l'économie.

Nous présenterons deux exemples parmi les plus significatifs :

- 1) Création de la marine militaire japonaise par l'ingénieur Emile Bertin
- 2) Modernisation et perfectionnement du système juridique japonais par Gustave Emile Boissonade

I. Japonisme et jardins japonais

Au XIX^e siècle, l'ukiyo-e devint, pour les artistes, une nouvelle source d'inspiration. C'est en 1872, dans la revue Renaissance littéraire et artistique, que le collectionneur Philippe Burty appela cette révolution le « japonisme ».

Parmi les artistes adeptes du japonisme, on trouve Van Gogh, Manet, Degas, Renoir, Pissarro, Monet, Gauguin, Vuillard, Bonnard... qui s'inspirèrent des procédés de l'ukiyo-e.

Ce mouvement ne toucha pas seulement la peinture, mais aussi les objets d'art avec les grès



émaillés de Carriès, les productions de la maison Christofle en métal patiné ou les oeuvres en verre d'Émile Gallé.

Les musiciens français, eux, s'intéressaient à une poésie plus concise, plus incisive, et plus délicate que la grande déclamation de l'opéra classique. Dans cet esprit, l'attention des compositeurs français se porta sur des traductions de tankas et de haïkus.

Maurice Delage séjourna au Japon en 1912 et traduisit lui-même les poèmes que son ami Igor Stravinsky mit en musique en 1913 sous le titre *Trois poésies de la lyrique japonaise*, oeuvre créée à Paris en janvier 1914.

Plus tard, d'autres compositeurs reprendront une telle facture poétique tel Olivier Messiaen (*Sept haïkaï*, esquisses japonaises, dont un haikai est consacré au parc de Nara), composé en 1963 après un voyage au Japon en 1962.

Le jardin japonais, lui, suivra en France son propre développement et viendra constituer un univers spécifique, au même titre que le jardin français, le jardin anglais, le jardin alpin ou le jardin méditerranéen, ascension remarquable pour un type de jardin « exotique », aux antipodes de ce que l'on peut trouver en Europe. Comme nous le savons tous bien, le jardin japonais cherche à interpréter et à idéaliser la nature en limitant les artifices.

Citons deux jardins japonais créés en France à la période où vécut Natsume Sôseki, les jardins Albert Kahn situé au Bois de Boulogne avec un village japonais créé en 1898 et un jardin japonais, avec ses deux ponts de bois, sa montagne couverte d'azalées, ainsi que le parc du château de Maulévrier, au sud de Nantes, créé entre 1899 et 1913, le plus grand jardin japonais d'Europe.

Maintenant, inversons la direction des échanges.

II. L'aide de la France à l'Empereur Meiji dans sa construction d'un Japon capable de rivaliser avec les plus grandes puissances mondiales

1) Création de la flotte militaire japonaise par l'ingénieur Emile Bertin

En 1885, l'empereur Meiji et le gouvernement japonais, voulant aller sur le continent asiatique et contrôler la Chine, décidèrent d'édifier une flotte militaire de tout premier plan.

Ils firent appel à Louis-Émile Bertin (1840-1924), âgé alors de 46 ans, très brillant polytechnicien et ingénieur naval, qui non seulement construisit la flotte militaire japonaise mais conduisit aussi ensuite la France, dès 1898, au deuxième rang des marines mondiales, derrière le Royaume-Uni.

Au début de l'année 1886, Émile Bertin, quand il arriva à Tokyo, fut chargé de mettre un terme à l'infériorité de la flotte japonaise vis-à-vis de la flotte chinoise. Sa réputation mondiale dans le domaine de la construction navale allait lui permettre de réaliser un programme ambitieux de construction de navires qui comporteraient toutes ses conceptions techniques (stabilité, cloisonnement par tranches cellulaires, ventilation, vitesse, fort armement...) qui sera approuvé par l'Empereur Meiji et le gouvernement japonais sans restriction ni réserve. Bertin fut chargé de toutes les constructions navales du Japon.

Sur ses plans, furent construits d'abord trois bâtiments de 4 300 tonnes, le Matsushima et le Itsukushima construits à La Seyne-sur-Mer, près de Marseille et le Hashidate à l'arsenal de Yokosuka, et quatre croiseurs modèle Armstrong de 3 000 à 4 000 tonnes, dont trois construits en Angleterre et un à Yokosuka. À ces quatre croiseurs s'ajoutait un cinquième, le Chiyoda, construit en Angleterre.

En outre, Émile Bertin établit encore les plans et ordonna la construction d'un aviso rapide, éclairneur de 1 609 tonnes, le Yaeyama, qui atteindra 22 nœuds (aux essais plus de 40 km/h), ce qui pour l'époque était une performance extraordinaire. Un bâtiment jumeau sera aussi construit à Yokosuka.

Sur le plan tactique, Bertin préconisait la vitesse, la puissance de feu et la formation de combat en ligne de file. Émile Bertin réorganisa l'arsenal de Yokosuka. C'est lui qui fit construire les arsenaux

de Sasebo, près de Nagasaki et celui de Kure, près de Hiroshima.

L'Empereur et l'Impératrice vinrent, à plusieurs reprises, aux lancements des navires construits par Bertin à Yokosuka.

Ce furent soixante-huit grands bateaux ultra modernes qui virent le jour, suivant les phases du programme et les plans de l'ingénieur français.

Les navires de Bertin constituèrent le noyau de la flotte japonaise de l'amiral Ito qui battit les escadres chinoises commandées par l'amiral Ding lors de la guerre sino-japonaise dans la célèbre bataille navale, au large de l'embouchure du Yalu, le 17 septembre 1894, à la frontière sino-coréenne et pendant la guerre russo-japonaise, les 27 et 28 mai 1905, la flotte russe de l'amiral Zinovi Rojestvenski, fut anéantie par l'amiral Togo lors de la bataille de Tsushima entre l'île japonaise de Kyushu et la Corée.

2) Création d'un arsenal juridique japonais moderne par Gustave-Emile Boissonade

En 1873, époque où, comme nous le savons tous, le Japon connaissait de très profonds bouleversements, Hisanobu Samejima, Ambassadeur du Japon à Paris, proposa à Gustave-Emile Boissonade, docteur en droit de la Faculté de Paris, de se rendre au Japon pour moderniser le système juridique japonais. Se séparant de sa femme et de ses enfants, Boissonade part pour le Japon et y vivra plus de vingt ans.

De 1875 à 1879, faisant preuve d'un don d'observation exemplaire, il rédigea en français le code pénal et le code de procédure criminelle, qui seront promulgués, après traduction en japonais et discussion au Sénat.

À partir de 1879, Gustave Émile Boissonade s'engagea dans la rédaction du projet de code civil qui s'achèvera en 1890, composé de deux parties : Boissonade choisit de s'occuper de la question des biens, tandis que ses confrères japonais traitaient des personnes et du droit de succession. Le code civil « Boissonade » fut révisé en mars 1893 suivant le modèle du code civil prussien. Toutefois, la grande partie du travail de Boissonade fut conservée.

Parallèlement à ses travaux, Boissonade consacra ses efforts à l'enseignement du droit moderne au Japon. Ses cours étaient donnés à l'École spéciale du droit français du ministère de la Justice dans l'université impériale de Tokyo, ainsi que dans deux écoles privées, aujourd'hui l'université Meiji et l'université Hōsei.

Le temps ne nous permet pas de nous attarder dans une conclusion. Tant mieux !

Car nous avons bien compris que ces si fructueux échanges entre le Japon et la France et entre la France et le Japon, à l'époque où vécut Natsume Sōseki, de 1867 à 1916, bien que si différents dans leur nature, furent tous marqués par une profondeur, une authenticité, un aspect crucial et une confiance mutuelle à toute épreuve qui en font un Modèle étonnant et unique d'échanges amicaux réciproques entre nos deux grands pays.

(日本語訳：森井桂子、奈良日仏協会会員)

夏目漱石が生き、著作活動をしたのは、1867年から1916年までの間です。この歴史的時期は、日仏両国が徹底の変貌と重大な跳躍を経験した時代であり、フランスにとっても日本にとっても、非常に重要な時代でした。

日本側からフランスに向けた交流について言えば、主として美術、造形芸術と庭園芸術に関するものでした。このような傾向を分かりやすくご説明するため、ジャポニズムと呼ばれたものと日本庭園をいくつかご紹介いたします。

それに対して、フランス側から日本に向けられた交流は、科学、工学、法律ないし経済の分野が主で、これらを日本に持ち込み、浸透させることでした。最も重要なものの中から、2例をご紹介します。

- ・技術者エミール・ベルタンによる日本国海軍の創設
- ・ギュスターヴ＝エミール・ボワソナードによる日本の法制度の近代化と完成



I. ジャポニズムと日本庭園

19世紀には、芸術家たちにとって「浮世絵」がインスピレーションの新たな源泉となりました。美術収集家フィリップ・ビュルティが、雑誌「文学と芸術のルネッサンス」の中でこのような変革を《ジャポニズム》と呼んだのは、1872年のことです。

ジャポニズムを信奉した芸術家には、ヴァン・ゴッホ、マネ、ドガ、ルノアール、ピサロ、モネ、ゴーギャン、ヴュイヤール、ボナールなどの名が見られ、彼らは「浮世絵」の手法から着想を得ました。

この運動は絵画のみならず、カリエスの七宝陶器、クリストフルの鍍金加工が施された金属製品、エミール・ガレのガラス作品など工芸品にも影響を与えました。

フランス人音楽家たちは、クラシックオペラの非常に大げさな表現より、もっと簡潔で、もっと鋭く、もっと洗練された詩風に興味を持っていました。

このような気風から、フランス人作曲家の関心は、短歌や俳句の解釈へと向けられたのです。

モーリス・ドラージュは1912年日本に滞在しました。そして彼自身が翻訳した日本の詩に友人イゴール・ストラビンスキーが、1912年に「日本の三つの抒情詩」というタイトルで曲をつけ、その作品は1914年1月にパリで初演されました。

その後、何人かの作曲家がこのような詩の表現方法を採用するようになり、例えばオリヴィエ・メシアンは、1962年の日本旅行後1963年に「七つの俳諧、日本のスケッチ」を作曲しました。（そのうちの一曲は奈良公園に当てられています。）

日本庭園は、フランスで独自の発展を辿り、フランス式庭園、イギリス式庭園、高山式庭園、地中海風庭園などと肩を並べ、独特の宇宙を構成するようになります。これはヨーロッパで見られる庭園とは全く違う《異国風な》庭の一形式としては異例の昇進ぶりでした。周知のように、日本庭園は人工物を出来るだけ抑えて、自然を表現し、理想化しようとしています。

夏目漱石が生きた時代に、フランスで作られた二つの日本庭園を取り上げておきましょう。一つはブローニュの森に1898年日本村と共に作られたアルベール・カーンの庭園で、二本の木造の橋と、ツツジに覆われた築山などを配した日本庭園です。もう一つは、モーレヴリエ城の庭で、ナントの南に、1899年から1913年にかけて作られたヨーロッパ最大の日本庭園です。

さて、逆向き（フランスから日本へ）の交流に話を移しましょう。

II. 世界の列強と競える日本の構築を目指した明治天皇に対するフランスの支援

1) 技師エミール・ベルタンによる日本国海軍の創設

1885年、明治天皇および日本国政府は、アジア大陸に打って出、中国（清国）を威圧するため、第一級の海軍を構築することを決定しました。

日本は、エコール・ポリテクニクを優秀な成績で卒業し、当時46歳の海軍技師だったルイ＝エミール・ベルタン（1840－1924）に支援を求めました。ベルタンは日本海軍を構築しただけではなく、次いで1898年からフランス海軍を、連合王国（英国）に次ぐ世界第2位に導いた人物です。

1886年初頭、東京にきたエミール・ベルタンは、清国海軍に対する日本国海軍の劣勢に終止符を打つ任務を負っていました。造船分野での世界的な名声のお陰で、彼は軍艦建造という野心的な計画を実現できることになりました。この計画には彼のあらゆる技術的構想（安定性、隔壁による区画、換気、速力、重装備…）が含まれており、それを明治天皇も日本国政府も、なんの制約も疑義を差しはさむことなく承認したのです。ベルタンは日本の軍艦建造の全てを任されました。

エミール・ベルタンの設計に基づき、まず4300トンの軍艦3隻、「松島」「厳島」がマルセイユ近くのラ・セーヌ＝シュル＝メールで、「橋立」は横須賀海軍工廠でそれぞれ建造され、さらに3000トンから4000トンのアームストロング型巡洋艦4隻、そのうち3隻は英国、1隻は横須賀で建造されました。これら4隻には、英国で建造された5隻目の巡洋艦「千代田」も加わりました。

さらに、エミール・ベルタンは1609トンの高速通報艦「八重山」の設計図を作成し、建造を指揮しました。その速度は22ノット（性能テストで時速40km以上）に達し、当時としては異例の記録でした。同型の軍艦は横須賀でも建造されることになります。

戦略についてベルタンは、速力、火力、縦列戦列を推奨しました。横須賀海軍工廠を再編成し、長崎近

くに佐世保海軍工廠を、広島近くに呉海軍工廠を建設したのも彼でした。

明治天皇、皇后は何度か横須賀を訪れ、ベルタンによって建造された軍艦の進水式に臨席しました。

このフランス人技師の計画工程と設計図に従って日の目を見た近代的超大型船は、68隻に上りました。

ベルタンの軍艦は伊東提督率いる日本海軍の中核となり、日清戦争の際、1894年9月17日清国・朝鮮国境、鴨緑江の河口沖での名高い黄海海戦で、ディン提督が指揮する清国艦隊を打ち破りました。また日露戦争中の1905年5月27、28日にはジノヴィ・ロジェストヴェンスキー提督率いるロシア海軍は、九州と朝鮮半島の間にある対馬近海での日本海海戦で、東郷提督により全滅させられました。

2) ギュスターヴ=エミール・ボワソナードによる近代日本の法制度の創設

1873年、周知のように、日本は大混乱を経験しましたが、パリの日本大使鮫島尚信は、パリ大学法学博士ギュスターヴ=エミール・ボワソナードに、日本の法制度を近代化するため日本に行くよう勧めました。妻子を残し日本に旅立ったボワソナードは、20年以上ものあいだ日本で暮らすことになります。

1875年から1879年にかけて、彼は申し分ない考証能力を発揮して、フランス語で刑法典と刑事訴訟法典を書きあげました。それは日本語に翻訳され、元老院で諮問された後、公布されることになります。

1879年から、ギュスターヴ=エミール・ボワソナードは、民法草案の作成に取り組み1890年完成をみます。この法案は2部で構成され、ボワソナードが資産問題を引き受け、同僚の日本人が「人」と相続権を扱いました。この《ボワソナード》の民法は、1893年3月にプロシアの民法を手本に改訂されましたが、ボワソナードの業績の大部分は残されました。

この仕事と並行して、ボワソナードは日本で近代的な法学の教育にも力を注ぎました。彼の授業は、東京帝国大学の司法省特別フランス法学校と、現在の明治大学と法政大学の前身である私立学校2校で行われました。

時間が許しませんので、結論を長々とお話することはできません。しかし、これで十分でしょう。

なにしろ、夏目漱石が生きた時代、1867年から1916年までの日本とフランス、フランスと日本のこのように大変豊かな交流は、それぞれ性格は全く違うものの、いずれも、奥深さ、真摯さ、重大さ、確固たる相互信頼等の痕跡を残し、それらによってこの交流が、2大国間相互の友好的な交流の素晴らしく類の無いお手本になるということ、私たちはよく理解できましたから。

***** 三木康子さんのピアノ演奏 (p-37 参照) *****

■閉会の辞

奈良日仏協会顧問（前会長） 坂本成彦

ご紹介いただきました坂本でございます。長い間のご清聴ありがとうございます。本日は公務ご多用の中、在京都フランス総領事シャルランリ・ブロン閣下には、ご臨席とご講演を賜り誠にありがとうございました。また、三野会長、ジャメ副会長にも格調高いご講演をいただき、私どもは感銘深く拝聴いたしました。さらに、ご祝辞を賜りました、奈良県知事代理の国際課長及川あずさ様と生駒市長の山下真様、来賓の皆様、そして華を添えていただいたピアノ演奏の三木康子さんにも御礼申し上げます。

奈良日仏協会はフランスが好きで集まった約100名の仲間でございます。これからも日仏友好・日仏文化交流の活動を通じて、楽しく続けて行きたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。なお、新入会員は大歓迎でございます。入会申込用紙等は配布資料に入っております。

最後になりましたが、ご多忙の中このように沢山の方々にお集まりいただき、深く感謝いたします。105年の時を経た旧奈良女子高等師範学校本館、今日の奈良女子大学の記念館で、新緑に包まれ、天候にも恵まれ、無事に式典と講演会を終えることが出来ました。ご挨拶を兼ねて閉会の辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

(閉会 16 : 45、参加者数 : 約 160 名)



第3章 会員寄稿文集「私とフランス」

この特集は、全会員に呼びかけ、自身が「どのようにフランス・フランス語（ないし日本・日本語）に興味と関わりを持ったのか」を軸に、自由に書いた自己紹介風エッセー集です。

Comme vous voulez !

浅井 直子

40歳を前にして大学の英文科3回生に編入学し、第2外国語として義務的に履修していたフランス語の授業の後で、一色裕美さんから「よかったらどうぞ」と Mon Nara を手渡された時のことを、今でもよく覚えています。当時一色さんは、同じ大学で心理学の聴講生をしていて、奈良日仏協会では Mon Nara の編集や色々な活動に携わっていました。後日、西部公民館でのジャメ先生の火曜夜7時からのフランス語講座に連れて行ってくれ、先生やクラスみなさんも親切に対応してくださり、そのまま日仏協会に入会しました。

昼間は仕事をしながら夜フランス語を習っているみなさんたちの、自分なりに勉強し、お互いをリスペクトするという雰囲気が、心地よく感じられました。先生も各受講生の意志を尊重され、例えば、来月は用事があるって授業に出られませんと少し緊張して伝えると、明るく屈託のない表情で、Comme vous voulez ! と返ってきます。すると気が楽になって、授業には出られなくても、できる範囲で勉強しようかな、という気になりました。

火曜夜のクラスで出会った玉谷直実さんに、自宅で開催されていた読書会への参加をお願いすると、「よろしければどうぞ」と、快く迎え入れてくださいました。仲井先生を講師に、一色さんや他の会員の方たちと一緒に、フランス語のテキストを丹念に読んでいました。メンバーのひとり川下裕史さんは、大学でフランス文学を専攻し、卒業後いったん就職した会社を退職し、1年間モンペリエに留学したという経歴の持ち主。いつもすぐれた読解をされ、いろんなことを教わりました。印象深いのは、川下さんのそうした読解の下地に、フランス語やフランス文学に対する愛情の裏打ちがあることでした。

次の年には、Mon Nara にブルターニュ地方の港町サンマロでの夏季講座への参加募集があり、行きたいけれども、初めてのフランス旅行・初めてのホームステイで、不安がいっぱいでした。すると、どこからともなくその話を聞いた会員の松元秀之さん（当時、御年80歳位）から、「昨夏サンマロでの研修に参加しました。何も心配する事はありませんよ。ぜひ楽しんで

行って来て下さい！」という手紙が届きました。結局その年、中谷みよ子さんと二人で参加したのですが、出発前には、当中谷さんと同じクラスで勉強されていた堀内曠子さんが、「よかったら来ませんか」と自宅に招いて、前年にサンマロで体験したことを話してくださいました。「学校が催す遠足にはできる限り参加した方がいいですよ」というアドバイスのおかげで、自分では決して行かないだろうヴィクトル・ユーゴーゆかりのガンジー島（イギリス王室属領）や、シャトーブリアンゆかりのコンブール城等を訪れることができました。研修で出会った人たちと一緒に小旅行には、通常の個人旅行や団体旅行とは違う楽しさがあります。その後もフランスで様々な研修を受けましたが、堀内さんの言葉はずっと生きています。

奈良日仏協会の会員の方たちの親切や好意は、今も変わりません。このところもフランスに行くたびに、長谷川明子さん、豊田真由美さん、中浦東洋司さん他の多くの方からの何気ない言葉が、貴重な経験をもたらしてくれました。昨夏は、私がニースに行くことを知った辻内郁子さんが、ニース在住の知人の方を紹介してくださり、はじめは初対面で畏まっていたのが、辻内さんとの関係を説明するのに、ジャメ先生の漱石講座でいま一緒に勉強していることを話すと、その方も以前大阪でジャメ先生のフランス語を受講されていたそうで、それから急に打ち解けて、その後さらに話がはずみ、昨年のニースでは思ってもみなかった素晴らしい出来事がたくさんありました。

日仏協会でフランス語講座を受講したことが発端となって、様々な出会いに恵まれました。会員同士の善意の連鎖のようなもの以外に、フランス語をやっていると、Comme vous voulez ! と、文字通り相手の望むことを察しながら、自由を尊重するフランス的なスタンスが自然に身につくからなのかな、など思うことがあります。



2013年夏、ニースでのフランス語教員スターージュにて（ジャメ先生との「漱石」の日仏二ヶ国語の授業例について関西教育研究会で報告、その懇親会で抽選に当たり参加）

本棚の「フランス」

泉 悦子

先日、奈良女子大学で催された記念講演会にゆき、諸先生の講演を聴いた。こんなに充実した企画を揃えてくださる文化的装置を無駄にしたらもったいない、と思った。そのこともあり、私は「フランス」のことをほんとうはどれくらい知っているのだろうか？ と思いはじめた、私の書架には、いちおうフランス人作家の本があるし、詩や俳句や批評書の中に、「フランス」のイメージが少なからず眠っている。埃をかむってるそれらの「フランス」を呼び出して視点を新たにしておかなければ、と気がついた。そうだった。すでに私は「ふらんす」と出逢っていた。

《旅上》 萩原朔太郎

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背廣をきて
きままなる旅にいでてみん。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしのめ
うら若草の萌えいづる心まかせに。

『純情小曲集』（大正年八月十二日刊、新潮社）

この詩を初めて読んだのは中学校か高校のころで、文庫本だったのではないだろうか。ともかくとても感動した。大人になって思い切って『萩原朔太郎全集』全五巻を買い揃えた。その第一巻『詩集（全）』（昭和四十三年十一月三十日／新潮社版第五刷）、《旅上》は、詩集『純情小曲集』（大正年八月十二日刊、新潮社）のなかの前半部分【愛憐詩篇】に収められている。後半はこれも有名な【郷土望景詩】の詩篇。両者の製作年が離れているが、叙情性と郷愁にあふれた小品がならんでいる。リズムや適度の哀愁。全体が明るい口調。ひらがなの「ふらんす」がとても効果的だ。萩原朔太郎に夢中になった。

次に思い出したのが、亡父がお酒が入るとよく歌っていたのがこういう歌謡曲。亡母も小さな声で和していた。

《青い背広で》（佐藤惣之助作詞、古賀政男作曲、歌 藤山一郎、昭和十二年）

1 番 青い背広で 心も軽く
街へあの娘（こ）と 行こうじゃないか
赤い椿で 瞳も濡れる
若い僕らの 生命の春よ

2 番 お茶を飲んでも ニュースを見ても
純なあの娘は 仏蘭西（フランス）人形
夢を見るよな 泣きたいよな
長いまつげの 可愛い乙女

3、4 番 （省略）

佐藤惣之助は萩原朔太郎の妹と結婚している。朔太郎の死後四日目に彼も急逝した、という因縁のある義兄弟詩人である。朔太郎のような純粹詩の方向ではなく、歌謡曲の作詞によって名声をあげ、大正昭和のモダニズムの興隆の中、詩歌の大衆化に貢献した。古賀政男とコンビで、「赤城の子守唄」「男の純情」「湖畔の宿」など昭和の流行歌の全盛をきずいてきたのだ。歌手の藤山一郎が青色の背広をきていたので、これは珍しいといつて、作詞したもの、だという（概要はウィキペディアより）。

この二つの詩を並べてみると、若い男性の心情がともよく似ている。「せめては新しき背広着て」きままなる旅に出るモダンボーイ。「みづいろの窓」にもたれて「ひとり楽しきことを思はむ」と心も弾み軽くなる。かたや、相手は「青い背広で心も軽く」活発なかわいい「フランス人形」と、街でお茶を飲む…、さしずめパリの街角の「カフェ」気分。そんなたのしいデートを、朔太郎だって「たのしきこと」、と思ったに違いない。「ふらんす」へゆくこと（朔太郎の詩）。フランス人形のような乙女とデートすること（惣之助の詩）…は、共通の心理だったはず。佐藤惣之助のこの詩は、さすが巧みに都市の青年の風俗をとりこんでいる。

また、グレタ・ガルボが主演したハリウッド映画の「椿姫」が公開（一九三六年）され、翌三十七年に日本でも公開された。「椿姫」は原作小デュマ。日本でもファンが多い。歌詞の中の「赤い椿で 瞳も濡れる」は、西洋映画や西洋の女性への関心をキャッチしているのだ、と思える。

二つの詩では、言葉（歌詞）の雰囲気や、情景設定や、心象の表現のあり方が非常によく似ている。朔太郎のピュアな叙情は、大正や昭和の都会人の風俗や関心と一体であった。惣之助は義兄である朔太郎のこの詩をきつと読んでいたのである。

大正昭和の詩精神に共通する西洋への憧れ、そのひとつの焦点は「フランス」にあった。



母の思い出と共にある私のフランス

工藤 順子

「パリの屋根の下」に1年半ほど住んだことがある。大陸から引き揚げてきて、しばらく経った頃のことである。父の実家に父を残し、母と私達姉妹はとりあえず便利な場所に住まないと話にならない、と言う結論に達したのだった。

「ここはパリの屋根の下よ」。映画『パリの屋根の下』（ルネ・クレール監督の1930年の作品、パリの下町での貧しい若い男女の愛の物語）を観て帰宅した姉が、そう命名したのである。それ以来、私達家族ばかりではなく、訪問客の間でも、その名称は少しペースのある愛すべき呼び名としてまかり通った。そこは、弘前市の目抜き通りから一筋入った下町風の町並みで、八百屋、肉屋、二流の仕出し屋などがあつた。12帖ほどの部屋には、木製の格子戸のある窓が、通りに面してあるだけだった。時々天井を鼠が走ると、私達はお互いに顔を見合わせた。

そんな日常の中、母のスクラップブックには、新聞や雑誌から切り抜いたパリモードが次々と張られていった。母の化粧品は殆どフランス製だった記憶がある、往時住んだ大連は自由港だったので、フランス製品も安価だったのだそうだ。母は私達姉妹に、パリモードまがいの服をミシンで仕立て、私達はそれを着て、弘前の目抜き通りである土手町を歩いた。アンドレ・ジードの「狭き門」が流行した頃である。

映画が大好きだった母は、その頃地方新聞社に、ある映画の作品評を投稿したらしい。その評はすぐ地方紙の文化欄に掲載され、その後、月に1度ぐらいのペースでその新聞社から映画評の原稿依頼を受けるようになった。やがて「コラム欄」が誕生し、大学教授や銀行頭取ら5人の中の紅一点として、齒に物着せぬ母のエッセイが載り、保守的な津軽の風土に一石を投ずる事となった。私は母のエッセイを殆ど読んでいないが、フランス的な感性を支持していた母は、フランス映画やパリモードにも触れたことだろう。

あるとき私が勤めから帰宅すると、階段の上がり口にお粗末なズック靴や下駄が並んでいる事があつた。旧制弘前高校の文学部の学生達が母の新聞記事にモノ申す、と言う理由で訪ねてきたらしいのだが、「パリの屋根の下」ならぬ屋根裏部屋で、彼らは機嫌よくお菓子を頬張ったり、お茶を飲んだりしながら、フランスをはじめとするヨーロッパの小説の話で盛り上がっていたに違いない。

亡夫との個人旅行で、パリに4泊5日滞在して観たり歩いたりした思い出はある。しかしパリは、それほど私自身に近いものではなかった。私のフランスは亡き母の思い出と共にあるのかもしれない。



昭和12年頃の母＝左の女性、大連の友人・工藤さん宅にて

（前列の男の子がのちに私の夫となる人、私は写っていない）

フランス語を始めたきっかけ

佐々木 幸代

10年以上前、仕事帰りに寄った書店で、入り口にあった雑誌のグラビア写真に目を奪われました。抜けるような碧い海、切り立つ斜面。そこがフランスのエズだと知り、すぐにでも行きたい衝動にかられました。

フランスに行くのならフランス語が話せたら良いと、その頃からNHKのラジオ講座のテキストとCDを毎月購入するようになりましたが、実際に始めたのは8年程前でした。フランス料理とモードに対しての興味がまず源泉だったと思います。その頃の私はチーズとワインにも興味があり、側に資格を持っている方がいらしたので、色々教えてもらい、常にチーズとワインが自分の食卓にありました。憧れから、もっとフランスのことを知りたいと思うようになり、コツコツ仕事の合間、帰宅してから少しずつ、ようやくNHKの講座を始めました。



そして1年後に、妹とパリに行きましたが、少し勉強したくらいで現地に行って話せる訳でもなく、とても悔しい想いをし、学校に通うようになりました。その時の先生が大阪長居の

世界陸上で仕事をされていた様子を聞き、私もそのような仕事に関わっていきたくて思いました。

たった一枚の写真がきっかけでまさかこんなにもフランス文化に惹かれ接するようになるとは当時は思いもしませんでした。エズは私にとって一期一会でした。

忘れ得ぬフランス技術留学

坂本 成彦

はじめに

大学のクラブの合宿時、先輩から聞いたシップドクターの話が面白く、北杜夫（斉藤茂吉の次男）が、水産庁調査船の船医としてインド洋～ヨーロッパ航路を航海したときの紀行文「どくとるマンボウ航海記」を読み、外国に興味を持ち、小田実の「何でも見てやろう」にも眼を開かれ、未だ見ぬ外国にますます憧れた。

社会人になって、当時としては、海外へは高根の華。何とかして外国に行きたいとおもっていたところ、フランス政府技術留学生の制度があることを知り、第二外国語でもなかったフランス語を一から始め、勉強の甲斐あって夢かなうことになった。

当時の日本は国土基盤整備の真っ最中。名神高速道路全通（1964・9）、東海道新幹線開通（同・10）、東京オリンピック（同・10）、日本万博（1970・3～10）、山陽新幹線 岡山まで開通（1972・3）など。欧米先進国への仲間入りする一歩手前であった。

仕事も区切りがつき、日本万博の翌年 1971 年 7 月 11 日、31 歳の田舎者が初めての海外旅行、それも花のパリへ発った。

パリ到着

オルリー空港に着くと、自分を呼ぶ場内アナウンス（勿論フランス語）があり、サービスカウンターへ行くと、A.S.T.E.F.（留学生受け入れの政府機関）のスタッフが迎えに来てくれていた。車中、結構会話が通じ、パリに着いて初めてフランス人とフランス語で会話が出来、嬉しくなって色々しゃべっていると受け応えの都度、相手は運転中にも拘らず、私の顔を見たり、大きなジェスチャーで両手を離したりするので、内心ヒヤヒヤしながらホテルまで送って貰った。

ホテルは 15 区メトロ・デュプレックス駅近くの「Hotel Duplex」。5 階建ての 4 階のシャワー・トイレ付きの小さい部屋。目抜き通りから少し入った通りで、イメージどおりのパリの雰囲気がある。街並みは 1 階が八百屋、パン屋など店舗、2 階以上がホテルやマンションの居住区になっている。

朝は、自動車の走行音、小鳥のさえずり、ガタガタした騒音、母親が子供を叱る声、明るい陽光、コーヒーの香りなどで目覚める。7 月のガラガラした太陽、青い空、緑の樹木。堅牢な石造りの建物には過去の遺産の蓄積による豊かさが感じられ、無駄な看板のない統一された美しい街並みに、これが憧れの都と感慨深かった。こうしてパリ到着は気分よく円滑に進んだ。



（研修中の筆者、モンサンミッシェルにて）

研修

プレステージ（本番前研修）で 1 ヶ月の語学研修をリヨンで終えると、8 月にパリへ戻ってきて、S.N.C.F.（フランス国鉄）の本社で担当官の説明を受け、その月の研修先と一等パスを貰い、本番の研修に入る。フランス全土を回れるよううまく組まれてあり、一箇所に 10 日～1 ヶ月滞在するので、荷物をデュプレックスホテルかパリ郊外のカシヤンの学生寮に預けて旅をした。

研修のテーマは、『鉄道の開発』。まだ日本は高度成長期で先進国を目指している時期だったが、社会が成長すれば、人手不足で人件費が上がり、企業の経費圧迫が考えられ、保線作業の機械化、省力化、合理化が求められ、保守作業周期の延命が必要であった。また、鉄道に付帯して、バス、タクシー、不動産、飲食、物販、宣伝広告など先進国に学ぶことは山ほどあると考えた。いわゆる「何でも見てやろう」で暇があれば歩きまわり、靴を 2 足履きつぶした。

フランス生活は、たった 1 年の短い期間ではあったが言葉では言い尽くせない多くのことを学び、経験を積み、人生を豊かにしてもらった。



Pourquoi le Japon ? (regard rétrospectif)

Olivier Jamet

Dans ce tout petit essai, je vais m'interroger sur les raisons qui m'ont amené à m'intéresser au Japon et à étudier la langue japonaise, ce qui permit, de nombreuses années après, de m'établir au Japon comme professeur d'université et d'avoir l'idée de créer avec quelques amis japonais notre Association Franco-Japonaise de Nara dont nous avons la très grande Joie de célébrer aujourd'hui le vingtième anniversaire.

Dans mon enfance, je vivais déjà baigné dans une atmosphère multiculturelle. La Russie, la Chine, le Japon ou la Corée étaient à l'honneur dans ma famille qui m'emmenait à chaque exposition ou presque que le musée Guimet ou le Grand-Palais organisait pour évoquer ces nations et ces cultures si originales. Pourquoi cette attirance marquée pour l'Est ? La raison était-elle que nous pouvions aller à pied à l'église russe, rue Daru, près du Parc Monceau, ou dans les musées cités, en profitant d'une agréable promenade dans les « beaux quartiers » ?

Etudier la langue japonaise allait de soi dans une famille où ma mère lisait le grec ancien à livre ouvert, où mon père s'intéressait à l'égyptien ancien (j'ai conservé son manuel qu'il chérissait) et où nous avions un très proche ami qui enseignait la langue basque à l'Université de Bordeaux. Les systèmes scripturaires et grammaticaux, produits les plus étonnants de l'Intelligence humaine, nous fascinaient et continuent d'exercer sur moi une fascination de plus en plus grande.

Le phénomène déclencheur qui allait être décisif fut le premier voyage que je fis au Japon en 1975, rendant visite à Tenri à un ami français qui y enseignait le français à cette époque-là. Cet ami, qui était mon voisin de palier dans l'immeuble du dix-septième arrondissement que j'habitais, contribua fortement à inoculer en moi cette passion pour l'Asie. Quittant le Japon, je m'étais juré d'y revenir, cette fois-ci, en en parlant la langue. Promesse tenue !



Et dès que l'occasion se présenta de me trouver suffisamment proche des bâtiments de l'INALCO pour m'inscrire en cursus régulier du soir, je sautais dessus (ce fut chose faite dès 1979). Quelques années plus tard, le grand Professeur de langue et de littérature japonaises Jean-Jacques Origas me proposait un poste à l'Université des Langues Etrangères de Tokyo... Un conte de fée !

私とフランスの出会い

佐藤 美知子

私とフランスの出会いは、大学の第二外国語で学んだフランス語でした。大学の専門は教育学部だったので、外国語科でなく本当にあくまで第二外国語に過ぎませんでした。

ただ、少女時代からフランスの歌や文化が好きで、当時、読んでいた岡本かの子の影響を受け、フランス留学を夢見たものです。だから、一生懸命

フランス語を学びました。

フランスの文化が、醸し出すアンニュイで都会的な雰囲気憧れ、ダミヤ、ピアフ、カトリヌドヌーブ、ジャンヌモローなど日本では出会わない、魅力的なマダムに沢山の事を教えられた多感な時代を懐かしく思い出します（笑）

でも、そういう青春を過ごしたことをすっかり忘れ、長い間、仕事や子育てに追われた日々を過ごしました。59歳で退職を迎え、はて、何をしようと思った時、学生時代に学んだフランス語を勉

強することに思い当りました。

まずNHKのフランス語講座を始めました。それは、テレビも、ラジオも愉快的番組でした。昔、林田先生が講義していた頃と違い（決して面白くないわけではなくあくまで授業らしい）、スキットや文法まで分かり易く、すぐに、夢中になりました。せっかくなのでと検定試験を受け、4級合格。

ちょうど、その頃、奈良日仏協会の存在を知り入会しました。

そしてその後、天理大学のサテライト講座でジャメ先生の講義を受ける機会を得ました。続けたかったのですが、なんと、昨年、乳がんになり治療に専念しなければならませんでした。

手術、抗がん剤投与、放射線照射の治療の中で、辛い気持ちを支えてくれたのが、フランス語検定受験でした。3級の受験勉強をすることで、自分を取り戻しました。家事の合間をぬって受験勉強をしました。

奈良女子大学で、若い人たちと受験したことが大きな自信になりました。無事に3級合格認定証を手にした時は、達成感一杯でした。

まだまだ、私はフランス語のひよっこですが、夢は奈良でガイドボランティアをすることです。

日仏協会の今年の方針案で、フランス語ガイドクラブを復活させると聞き、勉強や活動をして、何とか形にしていきたいと願っています。

でも、奈良日仏協会の方々は、レベルが高く追いつくのが大変そうですが、今さら焦らず（笑）楽しくマイペースで頑張りたいと思います。

そして、何より日仏協会の方々とお仲間になりワイワイ、やりたいです。どうぞ、よろしく願いいたします。

私のチューター、クローディア

蘭田 章恵

1995年阪神・淡路大震災がおこった年に、私はフランス語の勉強を始めました。フランス語は、大学の第2外国語として選択し、活用につまずき挫折していた外国語でした。「人生何が起るかわからないから、今心残りであることをしておこう」というのが、フランス語の再開に繋がりました。

第2外国語というのは、必須科目であったから義務で選択しただけあって、恥ずかしいことに、挨拶とアルファベ以外何も覚えていないという状態でした。4月からアリアンス・フランセーズに通い始め、奈良日仏協会の講座も並行して受講しま

した。

また無謀なことに、アリアンス・フランセーズの紹介で、パリでの夏期語学講座にも申し込みました。宿泊は、寮、ホーム・ステイ、ホテルの3つの中からホーム・ステイを選びました。せっかくなら、フランス語を使わざるを得ない状況に自分を追い込もうと思ったからです。

石橋を叩いても渡らないぐらい臆病な自分が、まさか40歳を前にして初めてのホーム・ステイを経験しようとは、思ってもみなかったことです。ホーム・ステイ先のマダム・クローディアは、離婚し、一人息子も独立したので、空いた部屋を利用して外国人をホーム・ステイさせて生活をしていました。

私が行った時には、1週間前からイタリア人の大学生2人が既に来ていました。彼女たちの方がもちろん私よりもフランス語は流暢に話せます。一緒に食事をするとき、やたらと«mec»という言葉を使っていたのが記憶に残っています。その時の私のボキャブラリーにはない言葉だったのです。彼女たちは私よりも多くのボキャブラリーがあり、さり気なく格好良く会話ができて羨ましく感じていました。

彼女たちは授業が終わっても、元気で夜遅くまでパリを満喫していましたが、私にはそんな余裕はなく、授業が終わるとランチをとって、予習のために早く帰宅していました。マダムは時々お茶に誘ってくれて、主に発音を矯正してくれました。彼女は私にとっての家庭教師でもありました。ある日、私に「イタリア人の彼女たちは、確かにあなたよりもフランス語は流暢に話すが、«mec»という言葉は連発するのには辟易とする。あなたのようなマダムは絶対に使ってはいけない言葉だから。」ときつく諭されたことが、一番印象に残っています。

外国語を覚え始めると、教科書で習う堅苦しい言葉だけでなく、口語体のカジュアルな言い回しも使えたらいいなあと思います。しかし、ネイティブでない者は、やはりきちんとした言葉を使う方がいいのでしょうか。私の家庭教師のクローディアは、細かい発音だけでなく、言葉によって「お里が知れる」ことを教えてくれたのです。それ以来、フランス語や英語だけでなく、日本語でも常に、きちんと話すことを心掛けるようになりました。



フランスと日本の食

谷野 知子

フランスへは観光旅行でも訪れたことがあります、他にも二回ほど語学研修で滞在したことがあります。

最初は1980年ごろで、グルノーブル大学の2か月の夏期講習に参加しました。この時食事はほとんど学食だったのですが、正直2か月後には食傷気味になりました。どのようなメニューだったのかよく覚えていませんが、あまり美味しくはなかったようです。もちろん大学の外でも食べる機会はある、その時は大変おいしく、生ハムを初めて食べたのもこの時でした。しかし大半は学食なので、この期間が終わるころにはうんざり、ぐったりとしてしまいました。

グルノーブルでの夏期講習の後、パリで一週間ほど滞在し、この時入った日本食レストランで食べた「きんぴらごぼう」は驚くほどおいしかったのです。日本へ帰ってからも洋食は避けて和食コーナーに突進するほどでした。

それから10年ほどして、再びパリで一年ほど滞在することになりました。やはり語学研修が目的だったので、お昼はソルボンヌ大学などの学食をとることが多かったのです。しかしこの時は前回とかなり違っていました。学食がとても美味しくなっていたのです。聞くところによると、この10年の間にフランスでは全国の大学の学食に対して大幅に改善が行われたということでした。本当によくなっていて、以前のような不満は全くありませんでした。

また、パリ市内で部屋を借りて自炊することになったので、初めてフランスでの食事情が分かってきました。

最初に感じたのは鶏肉がとても美味しいということでした。どうしてこんなに美味しいの？と思いました。たとえば鶏肝でも、日本だと香味野菜や調味料を入れて調理しないと食べられないと思いますが、フランスの場合本当に何もしないでそのまま調理しただけでも美味しいのです。ある人に聞いたら（詳しくは忘れましたが）、フランスでは、その何年か前からブロイラー飼育を一切やめたと言っていました。

果物がものすごく安いということにも驚きました。さらに、日本では冬に蜜柑をよく食べますが、フランスでは、確かマンダランという蜜柑によく似た柑橘類があり、蜜柑よりずっと美味しいと思いました。

フランスではスーパーマーケットだけでなく、ご存知の方も多いと思いますが、近くの広場で週3回ほど市場が立ちます。そのためスーパーだけでなく、また

違った品物（農家からそのまま届けられるのでしょうか？）も買うことができ、そういった意味でも食材の豊かさ広がります。

スパゲッティを食べに入ったお店で、料理が運ばれてくる前に、山盛りになったオリーブの皿が出されたのです。それを食べてすっかりオリーブ漬にやみつきになってしまいました。それはこの市場でも買えて、大きな樽に入れて売っていたと思います。

2週間のほどの旅行に、おやつとして持って行ったのですが、2週間持ち歩いても何ともなりませんでした。

また、食物繊維、その他の健康にかかわるような食材も豊富であるように思われました。

とにかく一年の滞在で感じたことは、それまで日本食はとても良いなどと思い込んでいたけれど、これは違うのではないかということでした。日本人が自分で勝手にそう思っているのではないかと思いました。日本では添加物の入った加工製品ばかりが多いように思われてきました。

パリ滞在の最初の2か月はパリ郊外にあるお宅でホームステイをしました。その家では他にも数人の欧米の女の子たちもホームステイをしていたのですが、アメリカから来た子が「なぜフランスには太った人がいないの？」と何度も何度も言っていたのを思い出します。

アメリカなど一定の国とだけ比較して日本食がよいと思い込んでいるのではなかったのでしょうか？

フランスの食といえばレストランで食べる食事のことばかり思っていたのですが、日常の食事とても大切にしているのだなと感じました。

日本でも、これから先TPPの問題もあり大変ですが、自給率・質ともに「食」を重要視していった欲しいなと切に願うところです。



私にとって特別な国、フランス

堤 昇子

フランスとの出会いは第2外国語として少し学んだ学生時代です。“エスプリ”を強く印象付けられましたけれど授業の内の一つに過ぎませんでした。それから30数年後、フランスに魅せられた友人が教室の開講を計画し、私も勧められてフランス語を始めることになったのです。1年後、級友たちとパリへ・・・オペラ座近くのプチホテルに1週間滞在して、パリでピアノの勉強をなさっていた奈良日仏会員の方の案内で、「フランス人の目線で」をコンセプトにパリ、ヴェルサイユ、ランスそしてシャルトルを巡りました。

パリでの1日を思い起こしますと、セーヌ川左岸のカルチュラタンでは狭い路地を歩き、学生達に人気のある小さなお店でチェニジアのクスクス、クレプリーでそば粉のクレープとシードルを戴きました。残念だったのは、午後3時頃立ち寄ったサンジェルマンデプレ教会のパイプオルガンのコンサートで不覚にも寝入ってしまったことです。夜は少しおめかしをしてオペラ座でロメオとジュリエットのバレエ鑑賞、休憩時間にはシャンパンを頂き夢心地でホテルに戻りました。わずかな滞在でしたが興奮と感動の毎日でした。

それ以来フランスは私にとって特別なものになりました。一つの言語を学び始めたことで新しい窓が開いたのです。文化、歴史をもっと知りたいですし、本も原語で味わっていきたいと思っています。



そして「フランス・アラカルト」に第117回より、西部公民館の仏語教室「BON MOMENT」の強力な仲間達と係わることになりました。微力ではありますが頑張っています。次回は6月25日(水)13時30分～15時30分、生駒コミュニティセンター・文化ホールに於いて梨里香さんのシャンソン、今井恵理さんのピアノ、杉本和子さんの詩の朗読と多彩なプログラムです。Paul Verlaineの「Clair de lune」をフラン

ス語と日本語で朗読、その詩をイメージの源泉として作られた曲の演奏等々・・・私も今から興味津々です。

奈良日仏会員の皆様と「素敵な時」を持ちたいと思っています。皆様の多数のご参加をお待ちしております。

私とフランス語

村田 公子

フランス語を勉強するのはとっても楽しいです。主人の転勤で名古屋市に居る時に、初めてNHKカルチャーセンターでフランス語を学習しました。関西に来て奈良日仏協会を知り、ピエール・シルヴェストリー先生に、グループレッスンを受けました。ピエール先生は、教えるのがとても上手で、毎回楽しかったです。

2011年3月に、15日間のフランス語短期留学のためニースへ行きました。旅行会社の企画の旅に一人で参加しました。一人で外国へ行くのは初めてで、とても不安でした。

ホームステイ先は二軒。一軒目は、40歳くらいの女性が一人で住んでいるお宅でした。20歳くらいの女の子がホームステイしていて、その子に最初の日、学校に連れて行ってもらいました。クラスでは毎日、前の日にあったことを生徒が順番に話してからテキストを開いて勉強が始まります。イタリア、ブラジル、日本などから来ていて、日本人の生徒が多かったです。

生徒のみなさんはとてもいい人たちで、楽しい時間を過ごしました。ホームステイ先の朝食は、台所にテーブルと椅子があり、そこで食事をしました。夕食は居間です。大きな円い皿にお料理をのせ、それを食べ終わると、その皿にまた料理を入れました。チーズが沢山出て、おいしくいただきました。そしてワインも。このような食事の仕方は、初めての体験でした。

二軒目のお宅は、フランス人のご主人様と日本人の奥様、9歳の息子と7歳の娘の四人家族です。ある日、ご主人様の実家へ連れて行ってもらい、家の各部屋を見せてもらいました。「こう言う事をするのが習わしだ」と奥様に言われ、びっくりしました。ご実家のご主人様に「そんなにフランス語はしゃべれません」と言うのと、「いいんだよ」と言われました。私はその言葉にぐっと来て、あたたかい方だと思いました。沢山のご馳走を用意して下さっていて、みんなとてもおいしかったです。

日仏協会のよくフランス語が出来る方がとてもうらやましいです。私はヒアリングの力がないのが悲しいです。それでも、自分なりにフランス語を勉強して行きたいと思います。

追憶—“フランスの川”紀行

中浦 東洋司

経済学や商学といった私と同時代の人たちの大部分が向かった道、これは当時の就職戦線にとっても有利で、大学選択の王道でしたが、それに抗いフランス語を選んだ理由にはそれほど根拠はありません。ただ、高校などの教科書で繰り返されてきた日本人の「文化と芸術の国フランス」への賛美が影響したかもしれません。

大学に入って初めて使用した教科書は、Hachette版で、その中のどこかで今も鮮明に記憶に残るのはロワール川に沿った王朝時代の貴族の諸城の記事でした。中でもシュノンソー城は、その解説文とともに私を魅惑して止まなかったのです。

◆憧れの城のほとりシェール川の水を汲む

「その城はロワールの支流であるシェール川をまたいで (Ce château enjambe le Cher.) 築かれ、五月になるとアーチ橋の下を水面すれすれに燕が飛び交う (effleure l'eau sous les arches du pont)」云々。この憧れの城を実際に訪れることができたのは実に 17 年後のことでした。

パリから普通列車 (TER) に乗ってトゥールの中央にある St. Pierre-des-Corps 駅で支線に乗り換え、30 分程度で遂に城と同名の Chenonceaux 駅に降り立ちました。無人駅でしたがその標識を見たときには自然と涙が出てきました。それから本物のシュノンソー城に出会った時の感慨はいかばかりだったか？ そこにずっといる訳には行かず、シェール河畔において小瓶にその水をいれて記念としました。トゥールへの帰途ヒッチハイクに成功したのも満足的一端となりました。



(シュノンソー城とシェール川)

◆ローヌ川からデュランス川へ

パリ・リヨン駅を出た TGV は一瀉千里にブルゴーニュ州、とくに主都ディジョンを駆けぬけ、短いトンネルをぬけると、もうそこはソーヌ＝ローヌ渓谷の始まりなのです。しかし日本と違ってそんなに急峻な山脈があるわけではなくソーヌとロワールを結ぶ運河さえあり、パリからマルセイユまでのクルーズもできるので

す。この分水界あたりは「ボジョレー」で有名なワインの産地で、リヨンはもうすぐ近くです。ここでスイスのレマン湖からきたローヌ川と合流します。

私の目指したのはさらに先のアヴィニオンで、しかもさらに支流のデュランス川を南に越えた小村にあるマヤーヌの教会でした。ここには、郷土のノーベル賞作家であるフレデリック・ミストラルの墓所や記念館もあって、その墓前に恩師の遺灰を納める目的がありました。恩師の教授は日本におけるプロヴァンス語の権威者の一人で、また「プロヴァンスの少女」の訳者でもあった関係で、ここの教会の許可を得て散骨しました。

デュランス川は氾濫川として著名で、私がフランス語を始めた時代には「川は呼んでる」(l'Eau vive) というシャンソンが流行していたのです。映画もありましたがあれから数十年を経て憧れの川に会えたのは感激でした。

ローヌ川の河口はアルルの南方、多くの沼がひしめくデルタのへりで掌状に分かれています。このあたりはフランス有数の水田地帯で、日本式に「田植え」され、私が訪れた時には濃緑の稲が地平線まで続いているのを見て、水郷などのイメージと重なりました。米の年収穫量は 9 万トン (60 万石) にもなるのです。

◆セヌ川の不思議色々

パリから西へ高速道路を走ると再びセヌ川に出合いますが、さらに走ると今度は流れが逆になっている川を渡ります。同行者に聞くと「これもセヌですよ」とのこと。なんとセヌ川は河口のドーヴィルまでに十数回の蛇行 (méandre) を繰り返します。霧の出る季節に通ると川の沿岸だけに丁度「霧のヘビ」のように懸っているのも車で通過すると霧→晴→霧→晴の繰り返しを楽しめます。

セヌ河口まで来るとその幅の広さに驚かされます。ル・アーブルから対岸のドーヴィルは霞んでかすかに見える程ですがその幅は 3 km を越えています。大潮の日には大西洋から大波が津波のように遡上するので

す。セヌ源流は、ディジョンの近くにあつてほんのささやかな泉から流出しているのですが、ここはソーヌ川やライン川の源流もあるいわば三川の分水嶺なのです。

◆マルヌ・モーゼル・ライン川

有名なワイン産地を潤すこれらの川は複数の国をぬって流れ、ぶどう畑を養っていますが、私はランスでマルヌ川と出合い、メス (Metz) やザールではモーゼル川と、そしてストラスブールでは雄大なライン川と出合いました。

これらの河水では、それぞれの地方の terroir と同質のものが流れていることは当然といえます。フランスの川を知ることは「土地の精」を感じる事なのです。これからフランスに行かれるみなさん、ぜひ「川」を見過ごさないでください。

シャンソンとフランス語と私

中辻 純子（梨里香）

とにかく歌の好きな子でした。幼い頃、近所の仲良しとママゴトをしているかと思えば、その遊び場がいつの間にかステージに変わり、ヒットパレードを繰り広げる始末。夕方、黒山の人だかりに母は赤面したと言います。

シャンソンとの出会いはちょうどその頃。大阪外大に通っていた叔父が、時々ギターを弾きながら聞かせてくれていたのが、シャンソンでした。勿論、当時は、フランス語はおろか、英語との区別も覚えないう少女。ただ、叔父の甘い歌声とその音の響きにうっとりしていたのを覚えています。

思春期を迎え、友人達がロックやポップス、或いはフォークに夢中になっているのを尻目に、来日したシルヴィ・バルタンやアダモを秘かに聞きに行きました。シャンソンをフランス語で歌いたい……ごく自然にそう思うようになり、フランス語の勉強を始め、タカラジェンヌに交じってシャンソンも習いました。しかし、シャンソンの世界も立派な芸能界。ごく普通の家庭に育った私には、飛び込む勇氣はありませんでした。

諦めた理由はもう一つあります。当時、フランス語だけで歌う歌手の方も指導してくれる場所も日本にはなかったのです。シャンソンを日本語だけで歌うことにはどうしても抵抗があり、結婚を機にその世界から離れることになりました。

シャンソンは、私の人生から遠のいてしまいました。が、フランス語はその後ずっと続けていました。大学卒業後は、パリ第4大学で学び、また、ガイドや語学講師をしながらも継続しておりました。その私のフランス語学習の中で最も大きな存在は、何といっても松島征先生（京都大学名誉教授）です。3年前に急逝されるまでの10年間の前半は京都大学で、退官されてからの5年間は私の主宰するサロンで詩や散文、また記号学についての講義をして頂きました。

フランス語は時として難解、決して扱い易い言語ではありませんが、その精緻さと美しさを松島先生に改めて教えて頂きました。

また、先生はシャンソンにも造詣が深く、常々シャンソンをフランス語で歌う重要性を説いておられましたが、そのことが、私の歌への情熱を呼び覚まし、シャンソンの世界に再び踏み込む勇氣を与えて下さいました。その後、ライブハウスのオーディションを受け、幸運にも合格し、シャンソン歌手として、ついにデビューすることができました。

思えば長い道程でした。

今夏は、『サンケイ巴里祭』そして、テレマンアンサンブルとの『フランス語で歌うシャンソン』に出演致しますが、数年前の私からは想像もできない夢のような幸せと感じております。これは、恩師をはじめ周りの方々のお陰であることは言うまでもありません。しかし、一方では、今日までフランス語が私を支えてくれていたからだとも思っております。

これからもフランス語で歌う歌手であり続けたいと願っている私です。それ故、厄介な彼（le français）と魅力的な彼女（la chanson）、そして私との三角関係は、当分終わりそうにありません……。



私とフランス

辻内 郁子

私がはじめてフランス映画を観たのは学生の時、『格子なき牢獄』（Prison sans Barreau）という作品でした。Corinne Luchaire の初々しかったこと！ 随分いにしえの話です。ハッピーエンドの楽しいアメリカ映画もいいけれど、陰影のある香り高いフランス映画が好きでした。『天井桟敷の人々』（Les Enfants du Paradis）、『禁じられた遊び』（Jeux interdits）、『肉体の悪魔』（Le Diable au Corps）、『赤と黒』（Le Rouge et le Noir）、等々。

映像も然ることながら、フランス語の音の何て美しいことでしょう。あれから幾星霜、私のフランスへの片思いは続いています。何かしらフランスとかフランス語とかに関わっていれば、ご機嫌なのです。フランス語がもう少し喋れたらいいなあと思いますが、今や日本語さえまなならぬ有様で…。でも私は死ぬまで francophile 婆さんであり続けることと思います。

ではごきげんよう！

彫刻の命令

野島正興

この春、知人の結婚式に出席するため大阪市公館を初めて訪れた。新婦は作曲家。友人たちのソプラノやバイオリン演奏で会場は幸せのメロディーに包まれていた。

宴のあとロビーに出てみると、ソファの近くにふと懐かしいブロンズ像が置かれている。

La Baigneuse「水浴」。両手を後ろに組んで立つ裸婦像。彫刻家・高田博厚（たかた ひろあつ）の作品である。

昭和52年夏、NHK盛岡に勤務していた私は、知人の誘いで北上市の北上画廊を訪れ、「高田博厚展」を鑑賞し、ここで初めて「水浴」に対面。ほどなく高田博厚氏ご本人が画廊に姿を見せ緊張感が漂った。

初めてお会いする高田さんは76歳。小柄で白髪、終始柔和な表情。そして、時おり見せる、押し込むような眼光の鋭さが印象的であった。

高田博厚は石川県出身。昭和6年に渡仏し、戦前、戦中、戦後を通じてフランスに滞在。昭和32年に帰国した。この間、フランスの哲学・文学・芸術を代表する人々と交友し、思索の造形とも言える肖像彫刻を制作した。

マルセル・マルチネ（詩人）、ロマン・ロラン（思想家）、アラン（哲学者）、ジャン・コクトー（詩人）、シャルル・ヴィルドラック（詩人）、ジョルジュ・ルオー（画家）はその代表作であろう。

北上画廊での高田さんの言葉は初対面以後、何度も反芻しているので忘れることがない。

「例えば肖像彫刻。ただ似ているだけでは、あなたがあなたであってあなたでない。こんなものは彫刻ではない」

「彫刻には彫刻の命令がある。これにそむいて何もできない」

彫刻の命令。

私には不思議に響き、今なお響き続ける言葉である。



高田博厚氏（右）と談笑（昭和53年3月）

高田さんにお会いするまで、私はフランスについての関心はほとんど持たず、フランス語を学んだこともなかった。だが、その後転勤した長崎では、32歳にして初めて「NHK ラジオフランス語講座」を聴いた。更に、次に勤務した松山、徳島、奈良ではそれぞれの地で、日仏協会の設立発起人となり知友を広げることになった。

盛岡を離れてからも、私は何かの時は高田博厚の著書を手にした。彼の自伝的著書『分水嶺』には奈良に住む者にとって興味深い一節がある。

紀元前六世紀のギリシャの「若い女（コレ）」や「若い男（クロス）」と、唐宋代の「人形像」と、法隆寺の「百済観音」や中宮寺や太秦の「弥勒坐像」、またロマネスク・ゴシックの頭部像と唐招提寺の「鑑真」や東大寺の「良弁」像との間に、なんらの「矛盾」も感じられない。それは「形式」が同一だからか？ いや、ちがう。同一の「形」に到達した「普遍性」があるからだ。（高田博厚『分水嶺』）

法隆寺の国宝・百済観音についての私の興味は、高田博厚のこの読書体験がなければ、その造形について特に意識せずにいたかもしれない。

平成9年10月、私は東京のニューススタジオで、百済観音の知られざる明治の修理をテーマとした取材「百済観音微笑みの秘密」と題した12分間の全国放送を行った。そして、ほぼ同じ時期に、百済観音は飛鳥時代の造像以来、初めて海外に出て、パリ・ルーブル美術館に展示されたのである。この偶然性はまことに不思議な巡り合わせと言うほかない。

ところで、今回、この奈良日仏協会創立20周年の記念原稿を書こうとして、久しぶりに『分水嶺』を開いてみた。すると、高田博厚がフランス滞在初期の昭和9年、ロマン・ロランやアランなどの他、「日仏協会」から資金の提供を受け、34歳で亡くなった悲劇の詩人Léon DEUBEL（レオン・ドゥーベル）の肖像を制作し、作品が故人の生誕地フランシュ・コンテ州ベルフォールの公園に設置されたいきさつが語られている。「高田博厚」と「日仏協会」がつながったこの喜びを何と表現しよう。

いずれ奈良日仏協会主催、東京日仏会館や高田作品の多くを所蔵する福井市美術館との共催で、私はこのレオン・ドゥーベル像を訪ねる企画を持ちたいと夢を広げている。これまた新たなる「彫刻の命令」であるのかもしれない。

若き日のフランス留学

濱 恵介

私がフランス語を学び始めたのは、大学に入学した1964年、第三外国語としてフランス語を選択した時である。わずか週一回の授業で教師は小林善彦助教授。この時点では、第一外国語の英語や第二外国語のドイツ語の方が必修で重要だったが、小林先生の見事な発音による授業は楽しみで、その後のフランス語への傾倒につながってゆく。

大学を出て就職した日本住宅公団には、フランスで住宅建設の工業化技術を学ぶ研修留学制度があり、これを当てに渡仏する可能性もあった。しかし、私が心から望んだのは専門とする都市デザインの領域であり、それに中堅になってから行かせてもらえる技術留学までは待てなかった。正直な狙いは、実際の空間体験に基づく都市デザイン研究をすると同時に、甘美なイメージを伴いながら恐るべきヨーロッパ文化の本質に直に触れることだった。即ち、思想・制度・技術などを発展させ、帝国主義的な力で世界を席捲し、明治維新以降の日本に圧倒的な影響を及ぼした文化である。

そこで、仏大使館文化部が窓口のフランス政府給費留学に挑戦することにした。毎晩欠かさずラジオのフランス語講座を聴き（往復葉書でテスト答案を送り）、2年目からは勤務後にお茶の水のアテネフランセに、翌年は水道橋の日仏学院に通った。何とかして公費でフランスへ行きたかった一念である。

出願した建築分野は芸術部門に属し、試験は主にフランス語。一次が筆記、二次が口頭試問だったか。最終審査では日本在住のフランス人建築家と元給費留学生で建築家の吉阪隆正早大教授とのフランス語による面接があり、自分が設計を担当した建築や住宅団地のプレゼンテーションを行った。幸いこの選抜試験に合格し、念願のフランス留学の機会と奨学金を勝ち取った。社会人3年目、1970年暮れのことだ。

研究テーマは「建築・都市の外部空間構成に関する研究」で、ヨーロッパの歴史的な都市に現存する広場や街路の空間から、美しい住宅団地づくりの原理を抽出しようとした。但し、学位の取得にはあまり興味がなかった。留学先はパリ美術学校を志望したが、1968年に勃発した大学紛争（五月革命）の余波でパリの大学等は混乱し「外国人留学生は全て地方へ」との指示から、東部のストラスブール建築・都市計画学校に決まった。この選択には、私の意識の中にヨーロッパ全般への憧れがあり、その中心はフランスかドイツ、という構図があったためである。ストラスブールはライン河の西側に位置し、向こう岸はドイツだ。この都市

を首都とするアルザスは、中世にはドイツ語圏に重なる神聖ローマ帝国の一部をなし、伝統文化や地名・地方語もドイツ風である。また、ドイツとフランスがたびたび領土争いをした地域としても知られる。

私のフランス留学はもう一つの人生の節目を伴った。朝子との結婚である。出会ったのは留学生試験の準備中。彼女は父親と一緒に初めて訪れたヨーロッパから帰国し、パリでの絵画修行を望んでいた。

1971年秋、両家の親・兄弟家族だけの簡素な結婚披露のあと、私は彼女を実家に残し単身フランスへ向かった。当時はアラスカのアンカレッジ経由で、約17時間の長旅。翌朝どんより曇ったオルリ空港に到着したが、パリで一泊することも許されず、午後の急行列車でストラスブールへ向かった。

ようやく新妻との生活が始まったのは、日常生活の勝手が分かり、二人で暮らす住居を確保し、春が間近になる頃を待ってから。彼女は旅費が安く多くの見聞ができそうな経路、横浜・ナホトカ航路、シベリア横断空路、そしてモスクワからウィーンへの鉄路でやって来た。携帯電話などない時代、1週間の旅のあいだ連絡も取れず「ウィーン南駅で某日の何時何分着モスクワ始発の列車出迎え」という手紙の約束だけで、何とか無事に再会できた。



美しいストラスブールに住んだ2年間には、勉学や日常生活などに加え、古いRenault-8を駆って二人で出掛けた旅についても語りつくせないほどの思い出がある。フランス国内はもとより、近隣のドイツ・オーストリア・スイスや、広場の調査を兼ねたイタリアへの周遊、さらにはスペインを経て北アフリカ・マグレブ3国へも足を伸ばし、初めてアラブ文化に触れるなど、感動に溢れる旅を重ねた。

これらの体験は夫婦共有の宝で、私とフランスの関係の中核となった。また、当時知り合った数組のフランス人夫婦とは今なお交流がある。様々な幸運に恵まれ、このような経験ができ、40数年経った今も懐かしく思い出せるのは、実に有難いことである。

私が感じるフランス

藤村 久美子

長らくシベリア上空を飛んでいた大韓航空機がレニングラードを過ぎるとやおら方向を変え南下し始める。飛行状況を写すスクリーンにはリール、そしてアミアンの文字。やがて眼下に宝石箱をひっくり返したようなひととき華麗なパリの灯が見えると、ああ又こうしてやって来た！ とまるで懐かしい恋人に再会したような気分になる。インチョン空港から 12 時間も閉じ込められた疲れも感じず、重い荷物をものともせず、ひたすら RER 線 B をめざして、迷路のようなドゴール空港内を歩く。

ドゴール空港始発の B 線には、停車する度に夕方の勤めからの帰りを急ぐ人々が乗り込んでくる。さまざまな言語が飛び交い、顔、形、服装、集団が醸し出す匂いまでが実に雑多な人の群れ。この独特の空気感！これがフランスに着いて最初に受ける洗礼。



住まいにパリ 14 区にある Cité Universitaire を利用していた私はよくここから RER や Métro を利用した。電車やバスの中はその国の国民性が現れていてとてもおもしろい。ある時、ちょっと混んだ車内で一人の男性が突如大声で演説を始めた。どうやら社会に対する不満を訴えているようだが、この光景に呆気にとられている私とは反対に、周りの人はまるで何もなかったかのように黙認していた。

昨年もモンパルナスのレストランで食事していたらガラスの向こうで、路上に店をだしている焼き栗売りの 2 人が、雨に濡れながら延々と言い争っていた。目と鼻の先でやっている喧嘩を見ながらの食事。自分の運の悪さに腹立たしくなったが、しかしこの時もレストラン内のお客はまるで見てないかのように食事を楽しんでいた。この国ではメトロであれ路上であれ、周りを憚らず自己主張し、また周囲も至って寛大、周りを気にする日本との違いを強く感じる瞬間である。

交通のスト、街中のデモに出くわすことはしばしば。コンサート会場に行けば、閑散として誰もいなかったなんてこともあった。フランス革命で培われた社会の矛盾や不条理に断固立ち向かう精神・国民性は、伝統として現代人にも受け継がれているのである。意思表示することに消極的であっては社会の進歩も発展もないから、これは誠に見習うべきものをつくづく思う。

負の遺産ではあるのだが、たくさんの植民地を有し、肥沃な土地に恵まれたフランスでは、野菜・フルーツ、海の幸など食材が豊富でとても美味しい。つい食いしん坊になってしまう理由もこの辺にあるのかも知れない。



いろんなものが混ざり合い刺激し合えば、奥行きのある洗練されたものに発展していくのは道理である。街全体が美術館といわれるパリ。そこには、音楽、造形芸術、文芸、すべての領域が混ざり合い、からまりあい、融け合って、何とも言えない芸術性を醸し出している。人々にこよなく愛される理由もそんなところにあるのかも？

しかし、そんな華やかな面の裏側を垣間見ることもしばしば。Noël の美しい街角で子連れの物乞いにお金をせびられたこともあり、いつか子供のスリ集団に奇声をあげて取り囲まれた時は恐ろしかった。多国籍、多民族、多文化の国が持つ光と陰はいろんなところを感じる。

妙な表現だが、いろんな矛盾を孕んでいるこの猥雑さの中にこそフランスの真骨頂があるのかも知れない。その微妙な嬖の中から文化が育ち、数々の芸術作品が生まれ出てくる。そんな風にも思える。

矛盾を孕みつつも既成概念にとらわれない発想で果敢に旧弊を打ち破ろうとする気概もあるフランス。そんなフランスが私は好き。

Douce France [旨し国フランス] いつまでも私たちが魅了し続けてほしい。

カトリック大和郡山教会にある

「浦上切支丹流配記念碑」について

樋口 順一

フランスと奈良に関わる話題を探してみました。日仏交流の歴史は、1858年（安政5年）フランス皇帝ナポレオン三世の命により、ルイ・グロ男爵が日仏修好通商条約22カ条と貿易章程7則を日本と調印したことに始まります。

この条約に基づき、1865年長崎の居留地にフランス人の礼拝堂として、大浦天主堂が建設されます。この教会は、特にアジアの布教のために創設されたフランス語を母国語とする教区司祭の会、パリ外国宣教会により建てられました。そして正式名は、日本二十六聖殉教者堂といいます。1597年（慶長元年）に豊臣秀吉により長崎の西坂の丘で処刑された日本人信徒20人、スペインやメキシコのフランシスコ会の修道士等を含む26人が、1862年ローマ教皇ピウス9世により列聖され、聖人の列に加えられたことによります。

大浦天主堂が建てられて間もなく長崎浦上村の村民数名が、天主堂のプティジャン神父を訪れ、キリスト教信者であることを告げます。以後、浦上以外の地区に住む信徒たちも神父の元を訪れることとなりました。2年後の1867年（慶応3年）浦上村の信徒たちが仏式の葬儀を拒否したことで信徒の存在が明るみに出ます。幕府は信徒を捕縛し、これを聞いたフランス領事、他各国公使は長崎奉行に対し人道に外れることと即座に抗議します。正式な抗議を申し入れたフランス公使レオン・ロッシュと将軍徳川慶喜が大阪城で面会し、話し合いが行われています。しかし、江戸幕府が互解した1868年（慶応4年）新政府は江戸時代からのキリスト教禁止を維持し、捕縛した信徒を流罪とする太政官達を出します。

1869年（明治2年）捕えられた長崎浦上のキリスト教信者3,416名は、名古屋以西の20藩に分かれて配流されました。その内86名が郡山藩に強制送致され、鍛冶町にある雲幻寺（現在の良玄禅寺）に収容されます。その後収容先は移りますが、郡山藩主柳沢保申（やすのぶ）の計らいで生活面の不自由はありませんでした。しかし、1871年（明治4年）政府の実情調査により取扱いが甘いと指摘され、待遇は悪化「改心」の説得は激しく、12歳から20歳までの男女は、親たちから離され、男子は現在の吉野郡天川村の天の川銀山で採掘労働に服されます。食糧不足や寒さに老人、病人は、難儀したと伝えられています。

雲幻寺境内に、殉教者6名の名が刻まれた大正15年7月建立の墓碑がありましたが、昭和44年11月カ

トリック大和郡山教会に墓碑を移し、浦上切支丹流配記念の碑としました。

奈良日仏協会創立20周年記念に際して、集めました資料から拙い文ですが、記述させていただきました。



フランスの文化の香り

長沼 静代

子供の頃から、童話、映画、文学、絵画等を通じてヨーロッパは憧れの存在でした。取り分けフランスにはイギリス、アメリカとは異なる独自の文化の香りを感じました。高校時代、マルタン・デュ・ガールの「チボー家の人々」を読み、カトリックとプロテスタントの宗教の差、フランス社会の精神構造、文化的背景に興味を持ちました。またモーリヤックの「テレーズ・デスケイルウ」は、杉捷夫の名訳と共に今でも深く心に残っています。

映画では子供の時にルネ・クレマンの「禁じられた遊び」に涙し、後年「太陽がいっぱい」、「シェルブールの雨傘」のラストシーンが夫々に鮮烈に衝撃的であり、また人生の哀感を漂わせて、私を魅了しました。

随分前になりますが、“あり得ない”と思っていたフランス旅行（ツアー）に行く機会が、一主婦の私にも訪れ、ニースからプロヴァンス、ロワール地方、ノルマンディ、そしてパリへと駆足で巡ってきました。それは初夏で、黄金色のエニシダ、赤いコクリコ、紫のリラ、そして青空と光と色に溢れた美しい季節でした。

今度はもう少し会話が出来る様になって、未だ行っていない地方や美術館巡りが出来たらと希望しています。フランス語を学ぶ事でフランスの文化の奥深さに少しでも近づけたらと、蝸牛の様に遅いのですが、今ジャメ先生のクラスでお世話になっています。

音楽留学の思い出

三木 康子

奈良日仏協会創立 20 周年おめでとうございます。

「Mon Nara 特別号」に投稿させていただく機会を得て、フランス留学時代を思い出しました。

私は、繊細で色彩豊かな美しいフランス音楽に魅力を感じ、本場で勉強したいと思ったことがきっかけで、パリに憧れて留学いたしました。今から 15 年前です。かつての流麗で装飾的でエレガンスで美しいフランス音楽の素晴らしさは、私が想像していた通りのものでした。

しかし、留学当時（1997 年～2002 年）のフランスは、かつての音楽を残しながら、新しく、力強く、たくましく、人や国がまさに発展する原動力の生きる力を底辺で支える芸術が脈々と育っているのをひしひしと感じました。音楽もその中の一つでした。

これは、意外でした。20 世紀から 21 世紀に変遷する終期末と新しい世紀の夜明けを異国パリで迎えたのです。

それは、現代アートや建築物、さまざまな作曲家の現代曲、背筋を伸ばしきさそうとフランスパンを食べながら街を歩くオフィスで働く女性たち……。

驚きでした。ロングドレスのお姫様のフランスはすでに過去のものでした。

私は、様々なものに対して興味が広がり、自分のもつ価値観にも影響を受け、「現代のフランスという国」の魅力を肌で感じ取りました。

留学中の私の日々の生活は、音楽院とプライベートレッスンに通い、それ以外の時間はすべてピアノの練習に明け暮れました。その中で感じたことは、フランス人の音楽家としての職業意識の高さ、社会的な地位の高さで、日本との違いに驚かされました。

生活面において、留学生の私を同じフランスに住む人間として、親切にいただいたこと、いろいろな思いやりの気持ちの中で分かり合えたこと、また適切なアドバイスを受けたこと等、フランス人との交流の中で得たものは数知れず多く、感謝にたえません。

また、フランスでの“Fête de la Musique”は、まさに国をあげての「音楽の祭りの日」でした。窓を開けると様々な音楽がどこからともなく聞こえてきました。この日ばかりは私も窓を大きく開けピアノを演奏しました。大人から子どもまで気軽に色んなコメントをくれました。皆が音楽を通

じ一つになれる幸せな瞬間であったことが強く印象に残っています。

その思い出が、今日の私の「ピアノ演奏の喜び」を支えてくれているような気も致します。留学して得たものは、多大であったと感謝の気持ちで一杯です。

また機会があれば、私がパリで過ごしたアパルトモンの屋根裏部屋や、懐かしい所々に出掛けたり、恩師にもお会いしたいと、パリに思いを馳せています。



美術館での至福の一時

南城 守

1989 年フランス革命 200 年祭で賑わう中、ルーヴル美術館で油彩画の模写をしておりました。17 世紀フランドル絵画の巨匠ルーベンスの作品です。日本大使館で証明書を発行してもらい美術館へ申請し、念願の許可書を手に入れた喜びは、明治時代の画家たちの追体験をしているような思いがしました。開館前の数時間、誰もいない展示室でイーゼルを立て作品と向き合った至福の一時は、四半世紀を経た今も鮮やかな記憶として残っています。しかしながら模写の難しさは予想をはるかに越えたもので、悪戦苦闘の姿に痛々しく思ったのか、模写部門の担当者から「大きな才能を感じる」と慰められ、嘘も方便と思いながらも、悪い気はせず、ほめることによって人材を育てる大きな教育法がしっかりと根付いているのだと感心したものです。

以後、私は曲がりなりに美術の世界で生きてきましたが、若い才能には、ただただほめる、そしてほめる、さらにほめる、短所などは長所でカバー、これが私の指導法の原点となりました。奈良日仏協会では美術鑑賞会などを企画して、芸術部門をより楽しく盛り上げたいと考えています。

パリ、ピアノ修行で感じたこと

三澤 知香

中学三年の時にお世話になっていたピアノの先生が、パリ・エコール・ノルマル音楽院で勉強された方でした。その先生の影響もあって、その頃から「一度、チャンスがあったらフランスでピアノの勉強をしてみたいな。」とぼんやりと憧れを持っておりました。

それから約10年後、その音楽院で勉強することが実現できたので、当時、自分でも大変驚いていた事を覚えております。

フランスでの学生生活の中で有難かったなと思う事の一つに、芸術に携わる者に対して寛大な文化があることでした。また、一流演奏家のコンサートチケットが日本では考えられない様な破格な値段で、学生達に提供されていたことです。それはうれしい驚きでした。(バスティーユのオペラ座で「カルメン」を見た時、学生券は確か7ユーロぐらいだったように記憶をしております。生きた馬が出演していました！)

音楽院に行くといつも校門に「cadences」と言う音楽新聞(無料)を、自由に持って帰れるように置いてありました。新しい号を見つけたら、同門の友達と目ぼしい演奏会がないかと目をこらしてチェックしていた事が懐かしいです。

質の高い演奏会や学ぶチャンスを気楽に体験できる様、学生に提供してくれるフランスには、脱帽です。芸術に対しての太っ腹さに、感謝、感謝です。

しかし滞在中、しんどかった事もありました。その出来事の一つに、アパート探しがあげられます。

フランスでは、私は外国人の学生です。その上、ピアノを持ち込み希望です。それらの条件を呑んで頂ける物件が、2ヶ月経ってもなかなか見つからなくて・・・自分が予想していたよりなかなか前進しないので「勉強は続けたいけど、住む所が見つからない・・・神様が日本へ帰りなさいって言ってるのかな？もう帰ろうか～」なんて弱気になっていた時もありました。

最終的には、不動産屋さんの入り口に目ぼしい物件が貼ってあったら、恐れずにその場でその物件の詳細を尋ねるなどを、本業そっちのけ？で毎日行っていました。その甲斐あってか、ありがたい事に、1ヶ月経った頃、ようやくピアノを弾くことについて理解が得られる物件が何とか見つかりました。しかし喜んでいるのも束の間で、不動

産屋さんに保証人が要ると言われてしまいました。がへん、「また、一から出直しか?!」と気落ちしていたのですが、その話を聞きつけた友人の旦那さん(フランス人)が、保証人になるのを買って出て下さいました。外国人の保証人なんて、とても勇気のいる事です。ピンチを救ってくれた友人夫妻には、今でも感謝してもしきれない気持ちで一杯です。

運良くアパートの管理人ご夫妻や大家さんご夫妻も親切な方々で「遠い日本からやってきて、きっとさびしいだろうから。」と言って、お茶の時間や元旦のパーティーなどに呼んで下さいました。その年は帰国ができない年だったので、誘って頂いた時は、すごくうれしかった事を覚えています。私にとって、パリの人は「都会人なので温かみに欠ける」ってイメージだったのですが、3組のご夫妻はいい意味で予想を裏切ってくれました。

フランスは、私の中の音楽・ピアノの世界に新しい風を入れてくれました。また、国を超えた人の温かさや「人は一人で生きているんじゃないんだ」と言う事を改めて教えてくれた所でした。



私とフランス

松本 サナエ

シャンソンが好きでフランス語を習い始めました。たまたま仲井先生より奈良日仏協会への入会のお誘いをうけ、主人の実家があやめ池でしたこともありまして、入会させて頂きました。以前ありました奈良ガイドクラブに参加し、未熟ながらフランス語圏の方々を奈良にご案内させていただきました。また、色々な催しにも参加いたしました。5年間位家庭の事情でブランクがありましたが、娘もフランスに御縁をいただきパリ郊外に住んでおり、御縁は続いておりますので、また色々参加させていただきたいと思っています。活動的な奈良日仏協会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

ポール・ヴィアラネー先生との出会い

三野博司

フランスについて語るとき、私にとってなによりもたいせつなのは、フランスという国でも、その土地でもなく、また文化や芸術でもなく、さらには私の生涯の仕事であるフランス文学研究でさえなく、そうではなくて、幾人かのフランス人との出会いと交際です。

ここではひとりだけをあげることにします。20歳代の終わりに、クレルモン＝フェラン大学の博士課程に留学したときに出会ったポール＝ヴィアラネー先生です。1980年、私は当時大阪市立大学の助手でしたが、大阪市から給料をもらいながら、2年間出張を許可されるというぜいたくな機会を与えられました。

ヴィアラネー先生は、当時からフランス19世紀の歴史家であるミシュレ研究の第1人者であり、全集の校訂・編集をされていましたが、同時に私の研究分野であるカミュに関する著作も発表されていました。たまたま間接的な情報で、ヴィアラネー先生がクレルモン＝フェラン大学におられることを知り、大学宛に手紙を書き、フランス語で書いた論文を添えました。先生の指導の下で、博士論文準備のための勉強をしたいという内容です。紹介者もなく、いきなり投じた手紙に返事がもらえるものだろうか……。心配は無用でした。間を置かずして、とても好意的な返信が送られてきました。その手紙を宝物のように携えて、1980年10月、クレルモン＝フェランへ行き、先生の研究室の扉を叩きました。

私自身が自分でも気づいていなかった力を先生は引き出してくださった、と今でも思います。優れた指導者である先生にとっては、当然のことだったのかもしれませんが、しかし、私には、遠方からやってきた異国の留学生に、これほどの懇切な指導と助力を惜しまない先生の姿勢が不思議なものにも感じられました。

先生の指導の下で書き上げた博士論文「*Le Silence dans l'œuvre d'Albert Camus*」（カミュの作品における沈黙）は、1987年フランスにおいて出版されました。今でも、フランスの学会において出会うフランス人の若い研究者から「あなたの著作から多くを学びました」と言われることがあります。カミュ研究における「沈黙」のテーマは、1987年以来、私の専売特許のようになり、2006年に刊行された「*Dictionnaire Albert Camus*」（アルベール・カミュ事典）においても、「*Silence*

」（沈黙）の項目について、編者から「この項目についてはあなたに書く権利があるから」との執筆依頼が来しました。

論文を書き上げてからも、フランスへ行くたびに、先生のお宅をたずねました。春から秋にかけては、先生はセイヤック（フランス中央部）の別荘におられることが多く、パリから数時間かけて3度お邪魔しました。オステルリッツ駅からトゥールーズ行きに乗って、ブリーヴで降ります。そこからバスの便などはないので、前もって電話して、先生に車で駅まで迎えに来ていただきました。

（このうち2002年のセイヤック訪問についてはMon Naraに書きました）

1980年代後半、大学退職後、先生は活動の場をパリに移されましたが、自宅はパンテオンのすぐ南にあります。書斎の書架に、先生にとって貴重なミシュレの全集が並んでいます。先生には毎年新年カードを送っていますが、それに私がフランス各地を描いたデッサンを添えました。そのつたない絵を、先生はいつも喜んでくださって、それがミシュレの豪華本と並べて麗々しく展示されているのを見たときは恐縮しました。

2013年8月、ノルマンディーのスリジーで開催されたカミュ生誕100年を記念する学会には、世界中から60名のカミュ研究者が集まり、一週間寝食を共にしました。80歳を越えるヴィアラネー先生も参加され、たいへんお元気でした。最終日のシンポジウム「日本とカミュ、カミュと日本」のパネリストとなった私は、発言の最後で自分の仕事についても少し触れました。すると、そのあとのディスカッションのときに、最前列におられた先生は立ち上がり、私との出会いの昔話を始められました。そして、話がさらに脱線して、私のデッサンを先生が書架に飾っておられることにまで発展して……。会場が笑いに包まれたのは、先生がこう言われたときです。

「私の家には「Musée de Mino」（三野美術館）があります」



（2013年8月 スリジーにおける国際カミュ学会にて）

フランスの心を読む楽しみ

森井 桂子

若い頃、大学の教養課程で第二外国語としてフランス語を選択したのは、ドイツ語より女性らしいかなと思っただけのこと。フランス語にもフランスにもほとんど興味がわからず、必要な単位を取るためだけに、教室の一番後ろの席で、当てられないことをひたすら願った2年間でした。

そんな私が30年後、子育てもほぼ終わり、続けていた仕事にも区切りをつけて、さて一生続けられる何か楽しい事を見つけようと考えました。

大好きだった塑像制作やその他いくつも手を出していた趣味を全て捨て、なぜかラジオのフランス語講座に耳を傾けたのです。あれだけ毛嫌いしたフランス語の学習が、単語を一つ覚えるごとに、本当に楽しいと感じられるようになったのです。

ジャメ先生の講座に通い始めると、ますます興味はフランス文化や文学にまで広がり、60歳を前にして、奈良女子大学文学部の3回生に編入学して授業を受けたいと思うまでになっていました。若い学生さんたちがとても真面目に勉強することに驚き、若い頃の不真面目だった自分を大いに反省したものです。

三野先生や諸先生方から、作家の思いを丁寧に読み解くことを学び、私が今までしていた読書は筋を追っただけで、作家の伝えたいことをほとんど読み取っていなかったことを知りました。

作家が考え尽くして使った単語の一つ一つを丁寧に受け取って、作家の思いを読み解くという作業が楽しくて仕方なくなりました。この楽しみをたった2年で手放すのは寂しく、授業を受け続けるためにとうとう大学院の修士課程にも進んだのです。

ところが、パズルを解くように作品を読み解くのは楽しいのですが、その結果を組み立てて、その作家や作品について理論的に論文を書く作業は、私には全く向いていないという事も分かりました。多分私は理論的にものを考えるよりは、情緒的にものを考える人間なのでしょう。

論文を書かずにこの楽しみを続けるために、受けたい講義だけを聴講生として受講する事にしました。この方法を学期ごとに繰り返し、今年も新学期が待ち遠しいです。

夜、一生懸命に辞書とにらめっこで予習している私を見て、「偉いですなあ……。感心するわ。若い時にそれだけ勉強してたら、今は博士かも。」と夫が冷やかし半分に褒めてくれます。

フランス語の学習が縁で大勢の素晴らしい友を得ました。心の友と言ってもよいフランス人にも出会えま

した。社会にも、家族にも何のためにもならない私のこのフランス道楽を、続けさせて下さる先生方や、応援してくれる夫や家族に感謝しつつ、意識がはっきりしている限り楽しむつもりでいます。



私とフランス語

石田 充伸

フランス語との最初の出会いは、病気で大学を2年で中退した自宅療養中に、たまたまNHKのテレビフランス語講座を見た時に遡る。フランス語の音の美しさに魅かれてとりこになり、2年間ほどフランス語の勉強に没頭した。自宅が大阪から奈良に移ってからは、毎週日曜日に奈良公園に行き、フランス人の観光客をつかまえては、ちょっとしたフランス語会話を楽しんだりしていた。

奈良フランス語クラブを知って、早々に例会に参加してみると、その質の高さに驚き、自分の未熟さを知った。頑張っただけで皆についていけなかった。2年を過ぎた頃、新聞求人欄に出ていたフランスからの化粧品輸入販売業者の社員募集に応募してみた。面接でフランス人社長のフランス語での質問にも答えることができ、無事合格できた。奈良フランス語クラブのお陰だと感謝している。

しばらくは奈良で仕事をしていたが、こんどは母の自宅介護が始まった。辛い日々を8年間送ったが、当時の仲井事務局長のお陰で、斑鳩にフランス語クラブを作ってもらい、ずいぶん介護が楽になったように思う。今もこのフランス語クラブ《Bonjour いかるが》で、フランス語の勉強を続けている。来年こそ、フランス旅行に行ってみたいと思っている。

40年前のフランス語との出会いから、フランス語は僕の生活の一部になっている。フランス語で時々冒険をし、シュードル Keiko & Yoko 姉妹、なだいなださんの娘さん、パリの美しい写真集を送ってくれた初老の御夫妻等、数えあげればきりが無いほど、新しい出会いに恵まれてきた。奈良フランス語クラブのメンバーの人達、奈良日仏協会の会員の人達、僕の人生の半分以上はフランス語に支えられていると思うと、感謝しても感謝しきれない思いです。

奈良日仏協会創立20周年に際して、ますます協会が繁栄し、日本とフランスの文化交流のみならず、今後、後に続く若い人達が活躍されて、さらに飛躍されることを祈る次第です。

第4章 回顧・資料編

この章では、奈良日仏協会創立の経緯や初期の様子を振り返るとともに、元会員からの寄稿、講師・出演者のプロフィールと演奏曲目、歴代幹部役員、記念行事スタッフ、祝賀パーティの写真などを収録し、回顧編＋資料編として構成します。

1. 創立の経緯と初期の活動

奈良日仏協会はどのように始まったか？

仲井 秀昭

「奈良日仏協会」の設立から早いもので20年が過ぎました。その誕生には偶然とも言えるいくつかの出会いがありました。時間の経過に沿ってその経緯を追ひ、初期の活動状況を振り返ってみます。

奈良フランス語クラブの誕生

そもそもの発端は、僕がフランス語を教えていた帝塚山短期大学のアメリカ人でアメリカの大学でフランス語を学んだ同僚、キャシー山根さんにあります。

1986年のある日、パーティの席で彼女は「奈良県が「なら・シルクロード博覧会」というのをするらしい、そのために県の職員を対象に奈良 YMCA でフランス語講座をするので私頼まれているのだけど、忙しいのであなた行かない？」と提案してきました。

それを受けて僕が YMCA に打ち合わせに行ったら、奈良女子大学外国人教師の成内ジョゼットさんが来ており、彼女と共に7月からフランス語講座を開始。それは早くも1987年3月に終了したのですが、奈良県職員を中心とした生徒（南城守現理事を含む）は講座の継続を希望しました。

そこで、僕が提案したのは、「講座もいいけど、「クラブ」にしない？」。で、始まったのが「奈良フランス語会話クラブ（後に「奈良フランス語クラブ Club Français de Nara」に改称）。月に1回（第3日曜日）、奈良市中央公民館（現中部公民館）で、フランス人ゲスト（「講師」と呼んでいました）を囲んでの会話クラブ。これがまた思ってもみない盛り上がりを見せ、関西各地から、日本人やフランス人以外にもいろんな国でフランス語を学んだ人が集まり、狭い第2会議室は毎回満員の盛況となったのです。

奈良フランス語クラブには、常任のフランス人講師が3人いて、その一人がオリヴィエ・ジャメ先生でした。各講師は4ヶ月に1回の輪番で会員の発表文

（exposé エクスポゼと呼んでいた）の講評・指導をしました。会長の僕は講師のお世話や（たまに臨時講師

も務め）初級者のための準備会や復習会（テープ起こし）の指導や添削などをしていました。

「なら・シルクロード博覧会」にはフランス語圏からの参加国がなく、フランス語を発揮するチャンスはなかったようですが、奈良日仏協会になってから、なら・シルクロード博覧会国際交流財団（NIFS）のいくつかの国際交流事業に関係を持つことになりました。

奈良日仏協会の設立への経過

1990年のある日、自宅にNHKのアナウンサーから電話がありました。NHK 奈良放送局に赴任してきた野島正興放送副部長でした。《私はフランス語を勉強していて、今まで赴任した各地で日仏協会の活動や設立に関わってきました。奈良でフランスやフランス語に関係した団体がいないか探していたら、貴会の存在を知りました》。さっそくやってきた野島さんは、なかなか見事なフランス語で自己紹介をしたあと、「奈良に日仏協会を作りませんか？」と言い出したのでした。

結果的に、この時点では奈良日仏協会は出来ませんでした。僕や他のメンバーは自由な「クラブ」の活動のままのほうが良いと思ったのです。

その後1993年に、オリヴィエ・ジャメ先生から《私は「アリアンス・フランセーズ奈良」を作りたい。奈良フランス語クラブの活動を見ていて、これが母体になったら》という提案がありました。（この頃から彼と僕は急に tutoyer になった）

そのときに僕が思い出したのが野島さんの言っていたこと。徳島にはアリアンス・フランセーズがあり、その母体となっているのが徳島日仏協会。さっそく徳島日仏協会の会則を取り寄せ、まずは「奈良日仏協会」を作ろうと言うことになりました。

「じゃあ、4月から」と言って、奈良市東登美ヶ丘のギャラリー松井に有志が集まったのですが、野島さんの意見は「まだ早すぎる。少なくとも1年間の準備が必要」とのこと。まずは「奈良日仏協会準備会」を3月に立ち上げ、すぐさまフランス語講座、フランス・アラカルト、フランス語クラブ、シネクラブ等々の定例会を開催して、いきなり300名を超える会員を迎えたのでした。「事務局」を設け、1994年4月の発会に向けさまざまな催しを設立前に始めたのでした。

その間に思ってもみなかったことが起こりました。「奈良日仏文化交流協会」が設立されたのです。その結果、奈良には二つの日仏協会が存在することになりました。

そしていよいよ1994年4月23日。奈良を代表するホテル・料理店である菊水楼で発会式を迎えました。奈良県の著名な組織のトップやフランス関係機関を発起人とし、450名を超える会員を抱えた「奈良日仏

協会」の創立です。ちなみに、菊水楼を会場に選んだのは今西初代会長、発会式に多くの政財界や宗教界の要人が参加したのは、のちに副会長になる児玉厚雄さんの力によるものでした。

二つの日仏協会の存在に気を使ったフランス総領事館は出席を見合わせましたが、ベルギー総領事の出席を賜りました。また東京の日仏会館からは、小林善彦常任理事（東大名誉教授）をお招きしました。野島さん制作のNHK 徳島局番組「バロン薩摩の夢を追う」のご縁です。

結果的にこの集まりは、奈良日仏協会の約 20 年の歴史の中でもっとも華やかなレセプションのひとつとなりました（その様子を字幕翻訳家の橋本克己氏が DVD に録画しています）。

協会初期の活動状況

協会ができて、いきなりやったのが同時期にナンシーからきたアマチュア・バレエ団の生駒中央公民館での公演でした。当時『万葉集』の仏訳出版の準備のため奈良に滞在していたルネ・シフェール先生と、現在も『古事記』の研究家としても知られるフランソワ・マセ先生と、さらに司会は当時奈良女子大学学長で奈良日仏協会理事でもあった田村俣先生らの支援を得て実現しました。

もともと Alliance Française de Nara を目指したこともあり、フランス語講座（のちに映画講座や料理講座も加わる）は奈良日仏協会の中心事業で 15 ほどの講座を事務局で直接運営していました。

事務局の事務所も構えました。当時奈良市西登美ヶ丘にあったフランス料理店《アラボンヌ》の 3 階の空いた部屋を借り、専任の事務局員（有給）もいて、さっそく最新式のパソコンも購入、日々、さまざまな催しの準備とかをやっていたのでした。スタッフも揃い、奈良日仏協会はあっという間に日本で一番若く、盛んな日仏協会として、知られていきました。

Mon Nara の由来

当協会の会誌 Mon Nara は、奈良日仏協会より古い歴史を持っていることを御存知でしょうか。それは奈良フランス語クラブの活動に遡ります。

Mon Nara（私の奈良）と題したエクスポゼを書いたのは須田紘太元副会長（元奈良教育大学副学長、故人）でした。東京出身の須田さんが緑溢れる奈良の地に来て生活を始めたときの率直な感想を述べたものです。奈良フランス語クラブでは毎月出席者がフランス語の作文を提出、それをめぐってフランス語の討論するのが恒例でした。例会のお知らせや会員間の情報交換用に会員通信を始めましたが、この発表を受けて《Mon Nara》と名付けられたのです。何年か経って奈良

日仏協회를立ち上げたときもそのまま継続しました。今日、既発行の号数が 260 を超えているのは、通算で数えているからです。

一方消えてしまったのは POT-POURRI（ポプリ）です。エクスポゼを 1 年分まとめて冊子にしたものですが、一枚一枚須田さんとコピーしたのが懐かしいです。それが写真入りで読売新聞に取り上げられたのがわれわれのマスコミ・デビュー。4 号まで出しました。

フランス・アラカルトの誕生

奈良日仏協会の主要行事の 1 つ「フランス・アラカルト」が如何に出来たか、を振り返ります。これは準備会から始まり、児玉厚雄さん（前掲）の提案《フランス文化についてのレクチャーとシャンソンの紹介とコンサートを定期的にしないか》を受けて、会場としてご紹介頂いたトヨタカローラ富雄で毎月催すようになりました。最初は「フランスあれこれ」とか言っていたんですが、当時理事をしていた橋本克己さん（前掲）が「フランス・アラカルト」は？と提案。さすがコピー感覚は抜群ですね。僕は当初シャンソンの歌唱指導をしていましたが、3 部構成では時間もなかったので廃止、講演とコンサートに 2 部構成になってゆきました。橋本さんは毎月毎回コーヒーを淹れてアラカルト参加者に配ってくれました。

忘れがたい人々・出来事

橋本さんと言えば、1993 年に日仏協会準備会を始めたときに奈良シネクラブをやってくれました。途中橋本さんがいなくなったので途切れていたシネクラブをピエール・シルヴェストリが再開してくれたのも懐かしい話です。

須田さんがフランスのキュリー研究所に勤められた 1987 年頃、僕との往復書簡を Mon Nara に連載したこともありました。2003 年、副会長のまま他界。

去って行った人たち、亡くなった人たち、20 年も経てばいろんな変化がおきます。シャンパーニュで農業祭に参加したり、アルザスで仏像写真展を開催したり、多くのコンサートもしました。作家やアーティストを招いての奈良女子大での講演会、いろんな団体との共催で映画祭や音楽祭も。

2006 年には奈良市大安寺で奈良日独協会との共催でドイツの総領事を招き「日仏独交流会（テーマ：EU）」を開催しました。

あらゆる局面で時に厳しく、でも大きな理解力で奈良日仏協会と僕を支えてくれた故須田紘太さんにこの原稿を捧げます。須田さんが居なかったら出来てなかったことも多いし、反対に須田さんが生き続けてくれていたら、きっと違っていただろうなと思うこともあります。 Merci, Kohta...

2. 元会員からの寄稿

Soixante ans からのフランス語

玉谷 直実

60 歳というのは新しいことを始める最終の年のような気がしている。私は阪神淡路大震災の年、1995 年に長年続けた仕事をやめた。60 歳だった。そのことは一面ホッとすることだったが、同時になんとも言えない空ろな喪失感に悩まされることにもなった。そのとき私を救ってくれたのは、近所のレストランで奈良日仏協会のチラシを見たことだった。この年から色々な仏語の講座が開講されるという。レストランの名前も忘れてしまったが、そこでも講座があるという。近くなので飛び込んだのが、入部紹子先生のクラスだった。

夜のクラスもあるので行ってみたのが、西部公民館でのジャメ先生と仲井先生と高橋節子先生のクラス。今の奇麗な西部公民館の前身で、奈良信用銀行の左隣にある、オンボロの建物だった。畳敷きの部屋で、長身のジャメ先生は立つたり坐ったり、大変ご苦労なさっていた。このクラスには、後にジャメ先生の夫人となった晴子さんがおられた。あるとき晴子さんから「私結婚することになったの」と言われ、どんな方かしら？ と思っていたら、お相手がジャメ先生とは！ 驚愕したのも懐かしい思い出だ。

私は中 2 から仏語のあるミッション・スクールに通っていたので、仏語の残り火が消えかけてはいたが、仏語にたいする愛着は無意識に温存されていた。60 歳で火をつけなければ、完全に消えていたはずだ。日仏協会に救われ、私は退職の喪失感から立ち直り、夢中になって仏語の勉強に取り組んだ。消し炭に火はついたが、悲しいかな、片言の会話と片言の文章が書ける、やさしい文章が読める位が精いっぱい。おまけに、もう少し頑張ろうとしたときに、夫が倒れて介護生活になり、クラスは 5 年余りで全部止めてしまった。

しかし、やはり火がついたものは消せない。介護中であつたが、我が家に来てくださる仏語仲間がすでに出来上がっていた。その仲間に一色裕美さんがいた。彼女は私に仏語のみでなく、パソコンも教えてくれたが、癌で 42 歳で早世。こんな悲しいことはなかった。彼女がいなくなり、また読書会も一時解散したが、最近また復活。今はエディット・シュタインという聖女の伝記の仏語文を 3 名で読んでいます。

その時間が私には宝石のように輝く幸せを齎してくれた。60 歳からの仏語は、しゃべる、書く、には届かなかったが、こつこつ読む力だけはついたようだ。そして何よりも、そこで出会う友人が日仏協会の中で出来たこと、この地域で欠かせない交流が保たれていること、これ以上の幸せはない。奈良日仏なしに quatre-vingts ans を過ぎてゆく日々の幸せはなかったと思う。20 周年おめでとう。私のように当会に恩恵を受けた人間がいたことを、覚えておいて頂きたいと思う。

C'est un artichaut.

川下 裕史

タイトルのこの例文が、私が初めてフランス語を学んだ文法書の、ほとんど冒頭に出ていました。「This is a pen.」と同じ構文であり、フランス語の単語の最後の子音字は発音せず、フランス語の名詞には男性と女性があつて、男性名詞単数につく不定冠詞は un で、発音においてはリエゾンやアンシェヌマンが起こって「セタナルティショー」となる...、等々の基本的な文法事項がこの文に盛り込まれているからなのでしょう。

「朝鮮アザミ」という辞書の訳語を見ても想像もできない単語を、いきなり例文に載せたあの教科書のおかげで、それから 30 数年を経た昨秋、私はその種を蒔くことを思いつきました。その前に、農業をしたくて会社を辞めました。私は未だに実際の「アーティチョーク」を見たことも食べたこともなかったのですが、先週、遂にそれを我が家の畑で収穫し、食べてみました。食べられる部分がほとんどなくて、あまり美味しくない、というのが感想です。しかし次から次と蕾が大きくなってきました。どうすりゃいいのか困ってきました。咲かせると食べられなくなるのですが、いっそ花を楽しもうかとも思っています。これから日本の梅雨を乗り切れれば、関西地方での栽培が可能ということになります。興味ある方はご連絡下さい。

近況報告を書かせていただきました。奈良日仏協会を通して出会う方々はいつも私の世界を広げてくれました。ありがたい御縁です。昔、Mon Nara の編集とその前身の Pot-Pourri (ポプリ) の編集をお手伝いしたことがたいへん懐かしい、それほどご無沙汰してしまっております。

みなさま、お元気ですか？ (2014 年 6 月 10 日)

3. 講演者紹介

(当日配布したプログラムより)

シャルランリ・ブロッソー Charles-Henri Brosseau

1968 年パリ生まれ。フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO) にて日本語と国際関係学を学ぶ。1995 年給費留学生として立教大学法学部政治学科に在籍。1997 年フランス外務省入省、在日フランス大使館で内政担当。2000 年本省・国際連合局・政治部 (アフリカ担当)、2003 年ニューヨーク国際連合・フランス政府常駐代表部一等書記官、2006 年在マレーシアフランス大使館公使、2009 年本省・東南アジア課長を歴任。2013 年 9 月在京都フランス総領事就任。アンスティチュ・フランセ日本 (関西) 館長。

三野博司 Mino Hiroshi

1949 年京都生まれ。1974 年京都大学仏文科卒。1985 年フランスのクレルモン＝フェラン大学博士課程修了、文学博士。1986 年大阪市立大学助教授、1991 年奈良女子大学助教授、1996 年教授。2010-13 年奈良女子大学文学部長。1982 年日本カミュ研究会設立以来代表を務め、2007 年からは国際カミュ学会副会長。2009-12 年日本フランス語フランス文学会関西支部長。2009-14 年奈良日仏協会副会長、2014 年から会長。著書に « Le Silence dans l'œuvre d'Albert Camus » 『カミュ「異邦人」を読む』『「星の王子さま」事典』、共著に『新リュミエール、フランス文法参考書』『小説のナラトロジー』などがある。

オリヴィエ・ジャメ Olivier Jamet

1949 年パリ生まれ。パリのリセ・カルノ校およびリセ・アンリ 4 世校、続いてパリ第 10 大学およびパリ第 12 大学で学ぶ。リセで教鞭を執ったあと、1976 年アルカテル通信システム・グループに部長として入社し、イナルコ (フランス国立東洋言語文化研究所) において日本語の学士号を取得。1985 年から東京外国語大学、次いで 1988 年から天理大学で教鞭を執る。夏目漱石などに関してすでに 100 本におよぶ論文、翻訳などを発表。ジャメ&ティミ株式会社社長、Cercle France-Kansai 事務局長。パルム・アカデミック勲章シュバリエ章受勲。

* * *

4. 演奏者・曲目紹介

(当日配布したプログラムより、写真は当日撮影)

(記念館・講堂でのピアノ演奏)

三木康子 Miki Yasuko

奈良県出身。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て同大学音楽学部ピアノ専攻卒業。文化庁派遣芸術家在外研修員としてフランスで研鑽を積む。パリ・エコール・ノルマル音楽院ピアノ科 Diplôme, パリ・スコラ・カントルム音楽院 Diplôme de Concert を最優秀で取得。ソフィア国際ピアノコンクール特別賞、ショパン・エチュード賞、ブレスト国際ピアノコンクールラヴェル部門第 1 位。ヨーロッパ、アメリカ、中国及び日本各地でリサイタルやオーケストラとの協演等、ステージ、テレビ等に出演。大阪教育大学、大阪芸術大学、関西学院大学、大阪樟蔭女子大学各講師。日本演奏連盟、奈良県音楽芸術協会各会員。



・武満 徹 (1930-1996) の「雨の樹 素描Ⅱ」は、オリヴィエ・メシアンに強い影響を受けた武満が、1992 年メシアンの追憶のために作曲したものです。格調があり精神的な宇宙世界を創り上げています。

・三善 晃 (1933-2013) 作曲の「アン・ヴェール」は、「韻文で」という意味です。緩-急-緩からなり、鋭いリズムや 12 音技法的な中にも、日本音階が随所に鏤められどこか懐かしさが感じられます。詩的な情緒漂う優しさがあり、三善晃のピアノ曲の代表作となっています。アンリ・デュティユーにも学び多大な影響を受け、近代フランス音楽の影響を強く受けながらも、現代音楽を推進させました。

・モーリス・ラヴェル (1875-1937) 作曲の「洋上の小舟」は、「鏡」の第 3 曲です。大海原での波のうねり、その中で一艘の揺れる小舟の光景がラヴェルの心のなかで映されたものとして描かれています。

・クロード・ドビュッシー (1862-1918) 作曲の「前奏曲第 I 集」より、可憐な美少女の肖像を美しいメロディーで描いた「亜麻色の髪の乙女」、ブルターニュ地方の海にのみ込まれた寺が時々海上に浮かびあがって

は、また海底に沈んでしまうという伝説から着想された幻想的な「沈める寺」, 「前奏曲第Ⅱ集」より終曲, パリ祭の夜空を輝かせる「花火」。最後は静かに遠くからフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」が聞こえてきます。

* * *

(奈良女子大構内、ラウンジでの祝賀パーティ)

梨里香 (中辻純子) Lyrica

大阪府立大手前高等学校, 同志社大学文学部卒業。パリ第4大学留学。声楽を稲垣孝子氏, 中村勢津子氏, ピアノを小林とし氏, 現在シャンソンを出口美保氏に師事。フランス語講師及びシャンソン講師を務める傍ら, 関西, 関東のライブハウスにレギュラー出演。2012年 Essaïon にてパリ初ライブ。また, シャンソンフォリー (日本シャンソン協会主催), フランス語で歌うシャンソン (日本テレマン協会主催), サンケイ巴里祭等に出演。シャンソンを原詞や自身の訳詞で歌う一方, 日本の楽曲をフランス語に訳し, 歌う。その確かで滑らかなフランス語の歌唱は, 松島征氏 (京都大学仏文学名誉教授) をはじめ, 内外のアーティストからも高い評価を得ている。日本シャンソン協会正会員。



土井 淳 Doi Atsushi

19歳より, やしきたかじん, 由紀さおり, 芹洋子, BORO, 宇崎竜童等さまざまな歌手のサポートメンバーに参加。現在, プライベートスタジオを構え, 数々のドキュメンタリー番組, CD のプロデュース等を手掛けている。主な作品: 松竹映画「わが心の歌舞伎座」, NHK スペシャル「鼓童 meets 玉三郎」。



『ばら色の人生: la vie en rose』恋多き女エディット・ピアフがイヴ・モンタンとの恋の思い出として, ピアフ自身が作詞, 作曲したと伝えられる。世界的にヒットし, 今やスタンダードとなっている。

『サン=ジャンの私の恋人: Mon amour de Saint-Jean』1942年リュシエンヌ・ドリール創唱。・・・ああ, サン=ジャンでもよそでも誓いの言葉なんて恋の罠, 彼とのことは終わった事・・・悲劇の恋をさらりと歌い上げる。今でもフランス人に人気の高いナンバー。

『さくらんぼの実る頃: Le temps des cerises』1866年ジャン=バティスト・クレマン作詞, その2年後アントワヌ・ルナールが曲をつける。現在歌い継がれている最も古いシャンソン。1871年パリ・コミュン後, 銃殺された連盟兵を悼んで歌われ始める。4番は1885年に付け加えられた。

『群衆: La foule』アルゼンチンを旅行中のピアフが巡り会ったペルーのワルツ。ミシェル・リブゴージュが仏語詞をつけ, 1956年オランピアにて歌われ, 大ヒットとなる。

『ハナミズキ』日本が贈ったサクラの木, その返礼としてアメリカ合衆国から贈られたハナミズキ。それから100年の時が過ぎ, そして, あの9.11・・・二度と悲慘なことが繰り返されないようにとの祈りを込めてこの曲は作られたと言われている。

Coin de Photos -1

記念講演の3講師

ピアノ演奏

祝賀パーティでのシャンソン



5. 歴代幹部役員・今年度役員等

注：*印は、年度途中の退任/就任

会長	任期（年度）	就任時の役職
初代 今西清悟	1994～1996	今西酒造社長
第2代 阪本龍児	1997～2000	南都銀行相談役
第3代 岡村元嗣	2001～2007*	岡村印刷工業社長
第4代 坂本成彦	2007*～2013	奈良交通相談役
第5代 三野博司	2014～	奈良女子大学教授

副会長	任期（年度）
須田紘太	1994～2003*
鍵元三四丈（みよたけ）	1994～1997
Olivier Jamet	1994～2006*、(再) 2011～
児玉厚雄	1998～2006
坂本成彦	2004～2007*
野島正興	2007～2010、(再) 2014～
三野博司	2009～2013
濱 恵介	2011～2013（事務局長兼任）

事務局長	任期（年度）
仲井秀昭	1994～2006
玄古博子	2007～2008
坂本成彦	2009～2010（会長が兼任）
濱 恵介	2011～

2014年度 理事・監事・顧問

会長	三野博司
副会長	Olivier Jamet
副会長	野島正興
事務局長	濱 恵介
会計理事	樋口順一
理事	浅井直子
理事	仲井秀昭
理事	井田眞弓
理事	中浦東洋司
理事	南城 守
理事	藤村久美子
理事	中辻純子
監事	三木正義
顧問	坂本成彦

6. 式典・講演会～パーティの運営担当者等一覧（カッコ内は役割、一部省略）

奈良日仏協会 役員・会員

三野博司（総合指揮、大学との調整、チラシ・看板準備、鍵管理、C設営、M）、野島正興（式典・講演会司会、非常時対応）、濱 恵介（タグ準備、C設営、館内管理、非常時対応）、樋口順一（国旗・横断幕準備、C設営、館外管理）、浅井直子（当日運営指揮、C受付、P設営）、仲井秀昭（質疑応答通訳）、井田眞弓（C受付、控室管理、P設営、会計）、中浦東洋司（領収証準備・C受付、M）、藤村久美子（P設営、C受付、M）、中辻純子（P設営、M）、三木正義（P・C設営、控室管理、祝賀パーティ司会）、中野愛弓（装花準備）、森井桂子（講演3通訳、装花移動）、高岡尚子（P設営、誘導、学生スタッフ指導）、高島眞貴子（コサージュ準備、C受付、M）、蘭田章恵（C受付、M）、佐々木幸代・小寺順子・古森和江（以上、C受付等）、長谷川明子（M）、藤本美智子（M）、松永光代（写真）

奈良女子大学文学部仏文科 学生

灘先絵美・関 柚香（以上、C・P受付）、青柳晴美・山下 茜（以上、C資料渡し、誘導）

その他 栗本遥香（誘導）

注：C＝式典会場、P＝パーティ会場、M＝資料袋詰め作業

福引景品提供：三野博司、中浦東洋司、南城 守、三木康子、森井繁夫

Coin de Photos -2

大学正門前の看板



記念講演



ピアノ演奏を終えて





祝賀パーティ風景 (参加者約 100 名)



■ 編集後記

当初の掛け声は「創立 20 周年記念誌の発行」でした。理事会では、協会の 20 年史や年表の作成、座談会の開催なども議論されました。ところが制作の引き受け手がいません。荷が重いのです。そのうえ歴史を辿れる資料の整理や引き継ぎもうまくなされていません。そこで、隔月刊の会誌 *Mon Nara* の別冊として、無理なく作れる特別号を発行することに決まりました。しかし、会誌の編集担当は特別号にまで手が回らず、やむなく事務局長の私が編集を担当することになりました。

この記念号の最大の特色は、会員からの寄稿文集「私とフランス」でしょう。会員有志がフランスやフランス語（又は日本や日本語）とどんな関わりを持ったのか、を振り返る形の自己紹介エッセー集です。提出は 26 稿にとどまりましたが、会員の相互理解に有益な素材となることを期待します。

予算の制約や編集スキルの限界もあり、体裁は簡素なものとなりました。しかし、内容的には節目の記録として良いものが残せた、と甘めの自己評価をしています。記憶は時とともに薄れますが、印刷物は保存される限りもう少し長生きし、（電子データより目に触れ）繰り返し人の意識を呼び起こすものです。

編集作業を終えるに当たり、寄稿者の皆様と、三野会長をはじめご支援・ご協力をいただいた関係者各位に、この場を借りてあつく御礼申し上げます。

2014 年 7 月 濱 恵介

Mon Nara 2014年7月 創立 20 周年記念特別号 numéro 263

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : afjn_info@kcn.jp FAX : 0742-62-1741

〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第 30 号[郵便物のみ] ©発行責任者：三野博司